

# 英国における「社会的養護児童」の教育的進歩

ケアと教育のデータ連携

Judy Sebba<sup>1</sup>、David Berridge<sup>2</sup>、Nikki Luke<sup>1</sup>、John Fletcher<sup>1</sup>、Karen Bell<sup>2</sup>、Steve Strand<sup>1</sup>、Sally Thomas<sup>2</sup>、Ian Sinclair<sup>1</sup>、Aoife O'Higgins<sup>1</sup>。

1. オックスフォード大学
2. ブリストル大学

## 謝辞

2つの主要な教育・ケアデータベースの関連部分へのアクセスを許可してくれた DfE(教育省)に深く感謝いたします。また、参加してくれた自治体、学校、教師、ソーシャルワーカー、里親、バーチャルスクールの校長の方々にも感謝いたします。そして何よりも、面接に答えてくれた若者たち、将来的にケアを受ける若者たちの教育経験を向上させるための意見を寄せてくれた若者たちに感謝いたします。

本報告書の草稿に対するコメントは、Michael Allured、Nina Biehal 教授、Katy Block、Jim Cockburn、Harry Daniels 教授、Bob Flynn 教授、John Freeman、Robbie Gilligan 教授、Angus Heberton、Emma Ing、Cheryl Lloyd、Jane Pickthall、Ruth Maisey、Dr Sara McLean、Dr Karen Winter からいただきました。私たちは彼らの協力にとっても感謝しています。

ナフィールド財団は、広義のウェルビーイングの向上を目的とした寄付慈善信託である。教育と社会政策に関する研究とイノベーションに資金を提供し、また、教育・科学・社会科学の能力を高めるための活動を行っている。このプロジェクトはナフィールド財団から資金提供を受けているが、記載されている見解は著者のものであり、必ずしもナフィールド財団のものではない。詳しい情報は、[www.nuffieldfoundation.org](http://www.nuffieldfoundation.org) より入手可能である。

2015年11月

© REES CENTRE/UNIVERSITY OF BRISTOL

ISBN : 978-0-9934738-0-7

eISBN : 978-0-9934738-1-4

\*リースセンター ([HTTP://REESCENTRE. EDUCATION. OX. AC. UK/](http://reescentre.education.ox.ac.uk/)) ブリストル大学政策学科

([WWW. BRIS. AC. UK/SPA/RESEARCH/PROJECTS/COMPLETED/](http://www.bris.ac.uk/spa/research/projects/completed/))、およびナフィールド財団 ([WWW. NUFFIELDFOUNDATION. ORG/](http://www.nuffieldfoundation.org/)) の各ウェブサイトでは、方法論、調査結果、分析についてより詳細な記述がなされた3つのテクニカルレポートを入手することができる。

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著 Educational progress of looked after children in England (2015) を日本語訳したものです。日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた半田聡先生、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます

早稲田大学社会的養育研究所  
所長 上鹿渡和宏

# 目次

<b>要旨</b> .....	<b>4</b>
主な知見と結論 .....	6
政策と実践のための示唆および提言 .....	9
<b>本文</b> .....	<b>11</b>
背景 .....	11
目的と目標 .....	12
方法論 .....	13
データ分析 .....	17
主な知見 .....	19
結論 .....	47
研究の限界 .....	50
政策と実践への示唆と提言 .....	51
今後の研究 .....	53

## 要旨

英国には、2015年3月31日時点で69,540人の社会的養護児童（CLA）がおり、2014年3月31日時点と比較して1%、2011年3月31日時点と比較して6%の増加であった（DfE, 2015）。これらの児童や若者の75%は里親委託で生活していた。ケアを受けている、または受けていた児童は、国際的に見ても教育的成果の面で最も成績の低いグループのひとつである（Flynn, Tessier, & Coulombe, 2013）。教育省のデータによると、2014年の英国でキーステージ1（7歳）の終わりにケアを受けている児童の71%がリーディングで期待されるレベルを達成し、ライティングでは61%、算数では72%であった。全児童ではこれらの科目の期待レベル達成はそれぞれ90%、86%、92%である。キーステージ2の終わり（11歳）では、その差はさらに広がる。英語と算数で期待される学力レベルに達しているのは全児童の79%に対し、ケアを受けている児童では48%であった。

達成度の格差は児童が大きくなるにつれて拡大し続けており、ケア経験者で大学に通っている者が6%であるのに対し、一般の若者では50%強となっている（DfE, 2015）。また、ケアからの移行期にある若者は、一般の人々に比べて雇用の見通しや健康状態が悪く、ホームレスや刑務所の集団にも多く存在する。これらの若者の教育的進歩を促進または制限する要因については、あまり知られていない。米国やカナダではこのような研究が盛んに行われているが、英国ではDfE（2011, 2013）が行った以上の詳細な統計分析は行われておらず、社会的養護児童の達成度低下に関連する主な要因を特定することはできなかった。

このような背景から、ナフィールド財団の助成を受けてオックスフォード大学のリースセンターとブリストル大学の政策学科と教育学科が共同で本研究を行い、ケアを受けている子どもたちのKS2末からKS4末までの進歩とKS4での達成度に関連する、ケアと教育の鍵となる要因を明らかにした。主なリサーチクエスションは以下の通りである。

### 英国の中等学校に通うケア中の児童の教育的成果が低い主な要因は何か？

ケアデータと教育データをリンクさせることは、児童の達成度と進歩を向上させる方法の理解にどのように貢献するか？

これらの疑問は、ケアを受けている児童が達成した成果における自治体間の差異の程度や理由を明らかにし、以下の解決に役立つことが期待されている。

- 成果の向上を最大化するために、どこに資源を投資すべきか（例えば、養育者を支援して委託の安定性を高めたり、地理的なサポートを提供して転校を減らしたりすること）を特定する。
- 教育の成果を高める可能性が高いと思われる実践方法を明らかにする。
- 国や地域のデータセットからのデータをリンクさせて分析する、さらなる研究を準備する。
- 複雑な問題に対処するため将来の利用に向けた、補完的なソーシャルワークと教育研究の視点および方法を開発する。

そのため本研究では、2013年にGCSE（16歳で受験）の受験資格を有したコホートを対象に、英国のNational Pupil Database（NPD）とChildren Looked After Database（CLAD、別名SSDA903）をリンクさせて、教育的成果と若者のケア履歴および個人の特性との関係を調査した。さらにこれらのデータを、要支援児童（CIN）に関連するデータおよび、要支援でなくケアも受けていない児童に関連するデータと比較した。

こうして5つの異なるグループのデータを分析の対象としたが、本研究の一部はこれらのグループの一部にのみ適用される。

#### **CLA-LT 早期エントリー**

滞在期間が長い社会的養護児童（KS4終了時に継続して12ヶ月間以上のケアを受けていた児童）で、KS2終了時にもケアを受けていた児童のグループ

#### **CLA-LT 後期エントリー**

KS2終了時にケアを受けていなかった、滞在期間が長い社会的養護児童（KS4終了時に継続して12ヶ月間以上のケアを受けていた児童）のグループ

#### **CLA-ST**

滞在期間が短い社会的養護児童（KS4終了時に12ヶ月間未満のケアを受けていた児童）のグループ

#### **CIN**

KS4の終わりに要支援児童であったが、ケアを受けていなかった児童

#### **対照群**

KS4終了時にケアを受けておらず、要支援でもなかった児童

使用した手法の詳細は、本概要報告書に添付されている3つのテクニカルレポートに記載されており、リースセンター<sup>1</sup>、ブリストル大学政策学科<sup>2</sup>、ナフィールド財団<sup>3</sup>のウェブサイトでご覧可能である。

これらの分析に加えて、6つの自治体で2013年にGCSEの受験資格を有し、12カ月間以上のケアを受けていた26人の若者たちへの面接を行った。若者たちはまた、彼らの教育キャリアにおいて重要な役割を果たした大人を面接のために特定した。これには18人の養育者、20人の指定教師、17人のソーシャルワーカー、6人のバーチャルスクールの校長たちが含まれる<sup>4</sup>。その目的は、26人の若者たちのGCSEの成果が予想以上に良かった、あるいは悪かった要因を理解し、サービスの調整がどのように貢献し得るかを理解することであった。

1 [HTTP://REESCENTRE. EDUCATION. OX. AC. UK/](http://reescentre.education.ox.ac.uk/)

2 [HTTP://WWW. BRIS. AC. UK/SPA/RESEARCH/PROJECTS/COMPLETED/](http://www.bris.ac.uk/spa/research/projects/completed/)

3 [HTTP://WWW. NUFFIELDFOUNDATION. ORG/](http://www.nuffieldfoundation.org/)

4 2014年の「子どもおよび家族法」では、英国の自治体は、その社会的養護児童の教育的達成を促進する目的で、少なくとも1人の人物を任命することが求められている。その人物、つまりバーチャルスクールの校長は、ケア当局の境界外にいる児童も含めて、当局の社会的養護児童の教育的経験と成果を向上させるためのアレンジメントを確実に行うための主責任者であるべきである。

## 主な知見と結論

### 1. 異なるグループにおける教育的成果と進歩

- 1.1 主要な対照群（ケアを受けておらず、要支援でもない児童）の成績が最も高く、次に CLA（早期エントリーと後期エントリー）の滞在期間が長いグループ、そして要支援児童が続き、CLA の滞在期間が短いグループの成績は最も低いものとなっている。このような異なるグループにおける児童の相対的な成績は、年齢層に関係なく一定の傾向がある。ケアを受けている若者で、以前の達成度が低かった者の中には、非常に良い進歩を遂げた者もいた。これらの知見は、ケアは要支援児童が経験する環境よりも教育に適した環境を提供しているという説明と一致しており、時に言われるような、ケアそのものが悪い成果をもたらすのだという意見に反論するものである。
- 1.2 要支援でなくケアも受けていない児童は、長期的に期待される教育的成績のベンチマークとなる。これらの児童と比較して、CIN は家庭や近隣の貧困の度合いが高く、特別な教育的ニーズを持つ可能性が高く、出席率が低く、退学が多く、学年が進むにつれて相対的な達成度が徐々に低くなっていった。
- 1.3 CLA-LT 早期エントリーグループ（KS2 終了時にすでにケアを受けていた児童）は、他のケアを受けている児童や要支援児童のグループと比べて、時間の経過とともに大きな進歩を遂げた。CLA-LT 後期エントリーグループ（KS2 終了後にケアを開始した者）の教育的成績は、早期エントリーグループおよび対照群の両方と比較して悪化したが、CIN ほどは悪化せず、CLA-ST グループと比べれば明らかにましであった。
- 1.4 CLA と、ケアを受けておらず要支援でもない児童との間の全体的な達成度の差は、時間の経過とともに徐々に拡大し、それは小学校から中等学校への移行後に特異的なものではなかった。我々の分析によると、この理由の一つは、より困難な問題を抱えて青年期からケアに入る児童は教育面でうまくいく可能性が低いことに関係していると考えられる。さらに、より若い年齢で入所した「成績の良い」児童の一部がシステムを離れた（養子縁組、特別後見人、家族再統合）可能性もある（ただし、確認のためにはさらなる分析が必要である）。

### 2. 個人の特性、教育の成果と進歩

- 2.1 CLA グループは他の児童と比べ、恐らくは生活環境の変化のため、貧困の指標（無料学校給食（FSM）、子どもに影響を与える所得貧困度指数（IDACI<sup>5</sup>））が時間の経過とともにより大きく変化している。このことは、CLA の GCSE 成果の予測因子として貧困度の指標が他の児童の場合よりも弱い理由となっている。
- 2.2 特別な教育的ニーズ（SEN）は CLA に非常に多く見られ、成果に大きな違いをもたらす。特別な教育的ニーズを斟酌すると、要支援児童または社会的養護児童とその他の児童との間の達成度の「ギャップ」はかなり小さくなる。CLA の成果がより劣っていることに最も強く関連する特別な教育的ニーズは、重度の/深刻な知的障害、自閉症スペクトラム障害、中等度の知的障害である。さらに、障害を持っていることもより劣った成果と関連していた。
- 2.3 CLA の GCSE 成果が悪いことを強く予測する他の変数は、男性であること、および Strengths and Difficulties Questionnaire（SDQ<sup>6</sup>）のスコアが高いことである。

### 3. ケア委託、教育の成果と進歩

- 3.1 調査結果から、ケアは一般的に保護的要因をもたらし、早期にケアへ入ることは、本研究の他のニーズグループで見られた成果よりも一貫して良好な成果が得られたことと関連していることが示唆される。後期のケア開始は有利に働くかもしれないが、受けたダメージを完全に元に戻すことはできない。面接では、ケアに入ったことが教育上有益であったという意見が圧倒的に多かった。
  - 3.2 里親ケアや親族ケアに入る時期が早ければ早いほど、より進歩がみられる。ただし、たくさんの短いケア期間の間に実親家族との再統合や、頻繁な委託変更や転校が散らばっているようなケースではないことが条件である。
  - 3.3 全体的に見て、10歳以降にケアに入ったほとんどの若者は、ケア期間が長いほど良い成果が得られた。同じことは、最年少（0～5歳）で初めてケアに入り、GCSEの年にまだケアを受けていたり、ケアに再び入っていたりする者には当てはまらなかった。
  - 3.4 転校と委託の変更は、どちらも社会的養護児童の教育的成果に対するリスク要因である。委託の変更によって転校することとなり、そのために教育的成果が低下している可能性を示すエビデンスもいくらかあるが、この影響の程度は比較的小さいものである。どちらの変化も、児童が困難を抱えていることを示している可能性がある。
  - 3.5 最終的に里親ケアや親族ケアの委託を受けた児童は、居住施設でのケアやその他のタイプのケアを受けた児童よりもGCSEの成績が良かった。これは、最終的な委託の期間をある程度反映したもので、委託が長ければ長いほど良い成果が得られる。
- 5 地域の低所得世帯に住む16歳未満の児童の割合。
- 6 SDQは、児童と青年のための自己/養育者の報告書である行動スクリーニング質問票である（GOODMAN, 2001）。

### 4. 学校教育、教育の成果と進歩

- 4.1 学校の種類は、成果の最も強力な予測因子の一つである。社会的養護児童の約40%はKS4で非主流校（特殊学校、生徒紹介施設、代替施設など）に通学しており、他の要因を揃えると、彼らの教育的達成度は主流校に進学した60%よりもはるかに低くなっている。
- 4.2 欠席、退学、転校は、GCSE成果に大きな差をもたらし、CINやCLAが被る不利益の大部分を説明している。教育上の不安定性は、養護を受けていなかったCINと短期間のケアを受けたCLAでは、長期間のケアを受けたCLAよりもGCSEの成績との関連が強い。無許可の欠席は、スコア低下の主な予測因子であった。
- 4.3 付加価値分析では、自治体（LA）レベルでの影響を示すエビデンスはほとんどなかった。しかし学校や生徒のレベルでは、ケアや学校の委託など、自治体の方針と実践を反映した多くの要因がある。

- 4.4 CLA、CIN およびその他の児童に対する学校の影響の違いを示すエビデンスは限られており、全体として、学校では3つのグループすべての児童の成績が同じように良くなったり悪くなったりする傾向にある。これはCLAの生徒を優先的に受け入れる入学資格の改革を支持するものである。しかし少数ではあるが、特にCINの生徒については、環境価値付加(CVA<sup>7</sup>)した成果が向上していると思われる学校も見受けられた。
- 4.5 若者たちは、教師や学校のスタッフが教育的進歩を決定づける主な要因であると考えていた。多くの若者にとって、養育者、教師、学校のパストラルサポートサービスは、彼らの教育的進歩において日常的に重要な役割を果たしていた。里親の教育支援は、教育的進歩の主な決定要因ではなかった。
- 4.6 調査に参加したほとんどの若者は、個人教育計画を通じて推奨されPupil Premium（生徒保険料；現在はPupil Premium Plus）から資金を得た1対1の授業を享受し、その恩恵を受けていた。

## 5. その他の要因、教育の成果と進歩

- 5.1 成功した児童は、他の家族内の問題はあれ、幼い頃から実親家族で教育的支援を受けていたケースが多い。多くの児童で、実親家族の問題は10代の間もずっと続き、そのことが学習に影響を与えており、ケアを開始してもその問題は解決しなかった。
- 5.2 今回の調査では、自分のことを心から心配してくれる人がいることが、若者にとって非常に重要であった。これは進歩の速い若者と遅い若者の両方に見られた。若者たちは、これまで経験してきたように期待を裏切られることはなく、自分の人生には意味があると感じる必要があった。それは、自分にとって意味がある以前に他者にとって意味がある必要があった。高い進歩を示すグループのほとんどが、感謝の気持ちを抱き、失望させたくないと思っている人との関係性に言及した。
- 5.3 里親委託のリソース（コンピュータ、ブロードバンド、本など）は、一部の親族里親を除いて、養護された生徒の進歩が低いことに関する重要な問題として現れてはいない。
- 5.4 若者たちは、最終的には自分の教育の進歩は自分次第だが、大人や専門家はその進歩に影響を与えることができるというように述べていた。この点に関して、我々の得たエビデンスにより、若者は支援に対してオープンである必要があると示唆され、それは「情緒的準備」と呼ばれている。

本研究には、データの欠落や定性的面接の実施における課題など、当然ながら限界があり、その結果、サンプル数は予定よりも少なくなった。

7 環境価値付加とは、生徒の特性、学校の状況やタイプを計算に入れた指標で、学校と生徒のプロファイルを考慮した上で、ある学校が予想よりも良い結果を出しているか悪い結果を出しているかを示すものである。



公式の統計や公的な議論において、要支援児童は、ケアを受けている児童に対する、多くの点でより適切な追加対照群となる。私たちの研究の重要な意義は、ケアシステムとその成果をめぐる社会的議論の性質に関係している。教育的達成度、特に GCSE やその受験の有無は、このような幅広い議論の代用としてよく使われる。養護を受けている生徒とその同級生の間には大きな達成度の差があるという事実は、児童と家族のためのソーシャルワークサービスを非難するものとしてよく使われる。我々のエビデンスによると、家庭で生活している要支援児童と比較して、ケアを受けている児童は、問題がより深刻である可能性が高いにもかかわらず、より大きな教育的進歩を遂げている (O' Higgins, Sebba, & Luke, 2015 も参照)。

ケアに入るのが遅く、場合によっては特別な教育的ニーズを含む大きな課題を抱えている若者がどのくらいいるかを考慮すると、進歩に焦点を当てることで、ケアシステムの成果をより現実的に描き出すことができる。当然ながら、達成度が重要でないわけではないし、若者たちにとって資格の取得よりも成長を基準にして仕事を確保することは期待できない。また自治体にとって、ケア集団による教育的進歩をどの程度、そしてどの程度の期間で期待することが現実的であるのかを見落としてはならない。

CLA の中には、ケアを受けておらず要支援でもない児童と比べて、教育的な潜在能力を開花させるのに時間がかかる者もいる。また、多くの者がケアシステムに入るのが遅いことを考えると、より長期的な視点で考えるべきである。多くの社会的養護児童にとって 16 歳での主要な公的試験の受験は早すぎるし、行動支援を受けるために特定のカリキュラムのルートに振り分けられることで機会が制限されることもある。面接に応じた専門家は、低学力の生徒の中には、安定し始め、自信と対人関係のスキルを身につけ、それが後に学習やキャリアの見通しに役立つ者もいるとコメントしている。米国の研究者が実証しているように、個人の達成やケアシステムの貢献に対する良好な評価は、18 歳、21 歳、そしてそれ以降で現れる可能性がある (Hook & Courtney, 2011)。

オフステッド教育・ケア査察の枠組みや、政府が発表する自治体のパフォーマンス比較表は、養護されている生徒の教育的成績には、個々の生徒や学校間の違いによるもの以外には自治体間でほとんど差がないことを計算に入れる必要がある。そのため査察では、各自治体における社会的養護児童の特徴を十分に考慮する必要がある。年齢が高く、困難な状況にある若者にケアを受けさせて法的義務を果たしている自治体は、そうすることでそのケアパフォーマンスデータを危険にさらす可能性がある。進歩と達成度のばらつきのほとんどは、生徒の特徴ならびにケアや学校での経験によって説明された。学校の裁量がより大きなシステムでも、自治体が個々の委託や学校を選択したり、サポートしたりすることで、これらの要因に影響を与えることができるのは明らかである。

自治体は、より高いレベルの学校に生徒を入学させ、(一部はバーチャルスクールを介して) 学校のスタッフが適切なサポートを提供するよう保証し、特に KS4 における委託の変更や転校を少なく抑えるためにサポートされるべきである。

実親は、長年別々に暮らしてきた人も含めて、ケアを受けている若者に大きな影響を与え続ける。実親が継続的な問題を抱えている場合、若者の集中力や努力に影響を与える恐れがある。面接では、安定した長期の里親委託が成功している場合でも、実親家族に対するソーシャルワークのサポートが若者の教育にとって重要であることが示された。

社会的、情緒的、およびメンタルヘルス上の困難を抱える生徒を支援するための取り組みが、退学（外的にも「内的」にも若者が質の高い教育を受けられない可能性がある）や転校など筆者らが強調した教育問題に対処するため、より広く周知され、研究される必要がある。こうした取り組みには、育成グループ (Cooper & Whitebread, 2007)、「アタッチメントを意識した」学校 (Rose, 2014)、生徒に対する「情緒コーチング」(Rose, McGuire- Snieckus, & Gilberta, 2015) などが含まれる。若者たちは、自分たちの教育的進歩は個々の教師や養育者の特性、スキル、コミットメントによるものだと考えている。面接では、自分が何をしているのかを理解し、粘り強く働きかけ、尊敬を集め、心から気にかけてくれた教師たちの名前が挙げられた。生徒たちは、無益で無神経な人たちに言及した。

里親は、チャレンジングな行動をとる脆弱な若者の世話をするプレッシャーに耐えられるように適切にサポートされるべきであり、そうすることで委託の安定性が高まり、若者の教育的進歩に役立つはずである。我々の得たエビデンスから、生徒たちは、安全で安心感があり個人が大切にされていると感じるなど、一定の前提条件が満たされると学習に取り組むことができることが示唆された。多くの場合、委託の中断は転校のリスクと結びついており、生徒たちは、たとえタクシーで長時間移動することになっても元の学校に残りたいと一貫して答えていた。しかしタクシーの手配は、より柔軟に、個々の若者のニーズに対応する必要がある。

生活の中で起こることに、若者たちをより深く関与させよう。生徒たちは生活の中でストレスを何とかしようとあがいていることが多いことを鑑みれば、彼らと一緒に取り組み、意思決定に参加してもらうための真摯な努力をするのは賢明なことである。面接に応じた若者の多くは、PEP やその他のミーティングに出席するために授業から外されたことなど、自分の教育に役立った要因や妨げになった要因をよく理解していた。

教育改善のための戦略は、居住施設の従事者全体で取り組む必要がある。今回の結果で意外だったのは、GCSE を受ける被養護者のうち居住施設で暮らす生徒の割合 (18.5%) であった。これは、小規模な居住型児童養護施設よりもはるかに幅広いグループであり、寄宿舎学校やセキア・ユニットも含まれていた。このような生徒たちは、最も困難な生徒の一群と言えるであろう。英国の居住施設はかなり縮小しているが、より多くの年齢の高い社会的養護青年たちにとっては重要な経験となっている。

特に親族里親は、その多くが影響を受け、学校教育にも悪影響を及ぼす可能性のある経済的プレッシャーに対処するためのサポートを必要としている。他の要因を計算に入れば、親族里親と一緒に暮らしている生徒は、親族以外の委託を受けた生徒と比べて教育的に不利ではないことを確認できたのは興味深いことであった。

本研究では、理論的・概念的な問題、青年期のケアサービス、学校における社会的・情緒的およびメンタルヘルス上の取り組み、Pupil Premium Plus (生徒保険料) の有効性の評価、全国のデータセットをリンクさせた方法論の追加など、さらなる研究分野を明らかにしている。

この種の研究としては英国で最も包括的な研究を実施する中で、どのようにして学校やサービスへアプローチすれば、社会的養護児童の学校教育と教育的成果に福音をもたらすことができるのか、より多くのことがわかってきた。この情報が有効に活用されることを願っている。

## 本文

### 背景

ケアを受けている、または受けていた児童は、国際的に見ても教育的成果が最も低いグループのひとつである (Flynn, Tessier & Coulombe, 2013; Trout, Hagaman, Casey, Reid, & Epstein, 2008 など)。また、一般の人々に比べて雇用の見通し (Hook & Courtney, 2011) や健康状態 (Dixon, 2008) が悪く、ホームレス (Davison & Burris, 2014) や刑務所の集団にも多く存在する (Centre for Social Justice, 2015)。教育の進度の悪さや達成度の低さは、こうした長期的な成果と関連することが知られており (Feinstein, Hammond, Woods, Preston, & Bynner, 2006)、Okpych and Courtney (2015) は、逆により良い教育的成果は、ケアから移行した若者のより高い収入と雇用の可能性を予測することを実証している。しかし、これらの若者の教育的進歩を促進したり制限したりする要因は、あまり明らかになっていない。英国の教育省は、これらの要因を特定するために子どものサービスを支援する 2 つのデータパック (DfE, 2011; 2013) を発行したが、ケアの経験と教育面の進歩との関係はまだあまり調査されていない。この関係をよりよく理解することで、学校や児童・若者向けのサービスは彼らの教育をよりよく支援し、その成果を向上させることができるはずである。

このような状況の中、オックスフォード大学のリース里親ケア・教育研究センターは、ブリストル大学政策学科および教育学科と共同で、これらの問題に取り組むため混合法による研究を行った。本研究はナフィールド財団の助成を受けて実施したが、本報告書に記載されている見解についての責任は著者にある。

### 社会的養護児童 (CLA) と要支援児童 (CIN) について

1989 年児童法第 20 条により、自治体は必要とする児童に宿泊施設を提供しなければならない、同法第 31 条により、ケア命令申請の対象となる児童の将来についてケアプランを作成しなければならない。そのような児童は、養護されていると考えられる。

一般の学童と比較することで、キーステージ 2 (KS2、11 歳) の終わりからキーステージ 4 (KS4、16 歳) の終わりにかけて、CLA が GCSE の結果や進歩において経験する正味の不利益を定量化することができるが、これはこの期間に格差が拡大するためである。しかし、CLA が個人的な事情から経験する不利益と、自治体の支援による (と思われる) 軽減効果を簡単に切り離すことはできない。CLA に対する責任に加えて、自治体は 1989 年法第 17 条に基づき、「必要としている地域内の児童の福祉を保護し、促進する」というより全般的な義務を負っている。これら要支援児童 (CIN) は、ケアされている児童よりもはるかに大きな集団である。この研究プロジェクトは、CLA の教育的進歩に焦点を当てることを目的としているが、CLA が含まれるより広範な CIN グループとの比較は、政策と実践のためのエビデンス基盤を求める人々にとって有益であることが明らかになった。そのため、いくつかの統計分析では CLA と、CIN のうちケアを受けていない児童とを比較している。

## 目的と目標

研究の全体的な目的は、ケアを受けている児童の KS2 の終わりから KS4 の終わりにかけての進歩と KS4 での達成度に関連する、主要なケア要因および教育的要因を特定し、改善につなげることであった。最初に設定した包括的なリサーチクエスチョンは以下の通りである。

- 英国の中等学校に通うケア中の児童の教育的成果が低い主な要因は何か？
- ケアと教育のデータを関連付けることは、児童の達成度と進歩を向上させる方法の理解にどのように貢献するか？

これらの疑問は、ケアされている児童が達成した成果における自治体間の差異の程度や理由を明らかにし、下記の解決に役立つことが期待されている。

- 成果の向上を最大化するために、どこに資源を投資すべきか（例えば、養育者を支援して委託の安定性を高めたり、地理的なサポートを提供して転校を減らしたりすること）を特定する。
- 教育の成果を高める可能性が高いと思われる実践方法を明らかにする。
- 国や地域のデータセットからのデータをリンクさせて分析する、さらなる研究を準備する。
- 複雑な問題に対処するため将来の利用に向けた、補完的なソーシャルワークと教育研究の視点および方法を開発する。

多くのサブクエスチョンが特定された。この調査結果報告では、これらをそれぞれ取り上げ、政策、実践、将来の研究への示唆を導き出している。

## 方法論

本研究では、2013年にGCSEの受験資格を有したコホートについて、National Pupil Database（国立生徒データベース：NPD）とChildren Looked After in England（英国の社会的養護児童：SSDA903、以下CLAD）のデータをリンクさせて、教育的成果と若者のケア履歴および個人の特性との関係を調査した。使用した手法の詳細は、本サマリーに添付されている3つのテクニカルレポートに記載されており、リースセンター<sup>8</sup>、ブリストル大学政策学科<sup>9</sup>、ナフィールド財団<sup>10</sup>のウェブサイトで見ることが可能である。

最初の2つのレポートでは、採用した定量的分析について説明している。テクニカルレポート1では、NPDに含まれるGCSEコホート全体の分析を行っている（下記の「サンプルの選択」を参照）。その中には、「社会的養護児童」「要支援児童」「彼らの同級生」の特徴と成果の比較や、自治体や学校の違いがこれら異なるグループの進歩にどのように関係しているかについての詳細な分析が含まれている。

テクニカルレポート2では、2013年3月31日時点で12か月間以上継続してケアを受けていたGCSEの生徒に焦点を当てている。これは、DfEのデータパック（DfE, 2011; 2013）でサンプル選択の基準となっており、ケアサービスがこれらの生徒に対応するための期間を設けることができる。このような児童の教育的成果や進歩および、それらが彼らの特徴やケア歴、通っていた学校によってどのように異なるのかを探る。

これらの分析に加えて、2013年時点で12か月間以上のケアを受けていた、または受けたことのある26人の若者たちへの面接を6つの自治体で行った。若者たちはまた、彼らの教育的キャリアにおいて重要な役割を果たした大人を面接のために特定した。その中には18人の養育者、20人の指定教師、17人のソーシャルワーカー、6人のバーチャルスクールの校長たちが含まれる。これらのデータの解析結果は、テクニカルレポート3に報告されている。その目的は、26人の若者たちのGCSE成果が予想以上に良かった、あるいは悪かった要因を理解し、サービスの調整がどのように貢献し得るかを理解することであった。そのために、6つの自治体の関連する政策や慣行を網羅し<sup>11</sup>、自宅から離れることによる教育への影響などの統計的分析を補完し、データベースに記録されていない要因（例；里親の資格や教育に対する考え方など）についても調査した。

### サンプル - 定量的

定量的分析には、2つの異なるサンプルと関連する変数を使用する。まず、2012年9月1日時点で15歳だった英国の就学児約64万人の全国コホートを、NPDで利用可能な変数のみを用いて（つまり、すべての児童のグループについて）調査した（テクニカルレポート1参照）。

次にこの全国規模のコホートのうち、より少数のCLAのみのサブサンプルは7,852人の児童から構成されており、そのうち6,236人が2013年3月31日時点でまだケアを受けていた。統計分析の主な対象は、2012年4月1日以前から2013年3月31日までの12か月間に渡って養護されていた少数のサブセット（4,849人）で、分析にはNPDとCLADの両方の変数が含まれている。5つの異なるグループのデータを分析の対象としたが、本研究の一部はこれらのグループの一部にのみ適用される。

- CLA-LT 早期エントリー：滞在期間の長い社会的養護児童（KS4終了時に継続して12ヶ月間以上のケアを受けていた児童）で、KS2終了時にもケアを受けていた児童のグループ
- CLA-LT 後期エントリー：KS2終了時にケアを受けていなかった、滞在期間の長い社会的養護児童（KS4終了時に継続して12ヶ月間以上のケアを受けていた児童）のグループ

- CLA-ST：滞在期間が短い社会的養護児童（KS4 終了時に 12 ヶ月間未満のケアを受けていた児童）のグループ
- CIN：KS4 の終わりに要支援児童であったが、ケアを受けていなかった児童
- 対照群：KS4 終了時にケアを受けておらず、要支援でもなかった児童

表 1：2013 年に GCSE の受験資格を有した要支援児童（CIN）と社会的養護児童（CLA）。

グループ	カウント	%
2013 年 3 月 31 日時点で、要支援でなく養護もされていない	622, 970	96. 9%
2013 年 3 月 31 日時点で、要支援	13, 599	2. 1%
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間未満養護されている	1, 387	0. 2%
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間以上養護されている	4, 849	0. 8%

備考：上記は相互に排他的なカテゴリーであり、コホート全体では 642, 805 人の生徒がいる。

養護されている児童は、同法の言葉を借りれば「健康または発達の合理的な水準を達成または維持するために」、あるいは「健康または発達への危害を防止するために」自治体のサービスを必要としているため、常に要支援と見なされる。2013 年 3 月 31 日時点で、CLAD のデータベースには登録されているが CIN のデータベースには登録されていない児童が少数おり、登録や登録解除プロセスの調整ミスがあったと思われる。その中には 15 歳をとうに越えており、同伴者のいない亡命希望者である可能性が高いと考えられる児童を含む。関与する人数は少数であり、調査結果に影響をもたらすものではなかった。

両データベースのデータは、UPN (Unique pupil number) を用いて個々の生徒にリンクされており、これにより英国の学校の国勢調査で収集された個人的特徴、授与機関から収集された試験結果、および SSDA903 申告で自治体から収集されたケアのエピソードをリンクすることができる。定量的な分析では、2013 年 3 月 31 日時点で 12 ヶ月間以上のケアを受けていた児童に焦点を当てている。ケア期間が短い児童、2013 年に支援を必要としていたがケアを受けていなかった児童、そして当時、ケアも支援も必要なかった大規模な若者たちのコホートとの比較も行われている。若い頃にケアを受けてただけで、キーステージ 4 の終わりではケアを受けていなかった児童はこのデータセットでは特定できず、「要支援ではなく養護もされていない」グループの中では非常に小さな割合となる。

8 [HTTP://REESCENTRE. EDUCATION. OX. AC. UK/](http://reescentre.education.ox.ac.uk/)

9 [HTTP://WWW. BRISTOL. AC. UK/SPA/RESEARCH/PROJECTS/COMPLETED](http://www.bristol.ac.uk/spa/research/projects/completed)

10 [HTTP://WWW. NUFFIELDFOUNDATION. ORG/](http://www.nuffieldfoundation.org/)

11 すべての面接スケジュールは著者から入手可能である。

NPD は、ナショナル・カリキュラムのキーステージでの達成度、学校への出席率、退学に関するデータを提供している。CLAD の報告書には、日付、法的根拠、場所、委託に関わったプロバイダー、委託のカテゴリー（例；親族以外の養育者のもとでケアされているか、「キンシップケア（親族ケア）」と呼ばれる家族や友人のもとでケアされているかなど）、システムを離れた際の目的地（養子縁組されたか、実親家族に戻ったかなど）など児童のさまざまなケアおよび委託のエピソードに関するデータが記載されている。どちらの資料も基本的な人口統計データを提供している。分析を単純化するために、欠席と退学に関する生徒レベルのデータを中等教育の 5 学年に集約し、ケアのエピソードに関するデータを児童レベルに集約した。

CLA と他の児童との比較では、この調査は NPD の変数のみを対象としている（つまり、NPD のデータ-テクニカルレポート 1）。調査した変数は、環境価値付加（CVA<sup>12</sup>）モデルにおいて GCSE 成果の実質的な予測因子であることが知られているものであった。生徒レベルの変数は以下の通り：

- 人口統計学的特性：性別、民族、家庭での使用言語
- 家族の貧困や社会経済的地位を表す無料学校給食（FSM）の受給資格
- 子どもの居住地の郵便番号における、子どもに影響を与える所得貧困指数（IDACI）で測定した近隣地域の貧困度
- 主なニーズの種類別に分類された特別な教育的ニーズ（SEN）
- 学年間および学年内での転校
- 許可されたものと許可されていないものに分類された欠席
- 退学（期間限定の退学（停学）の回数と期間、永続的な退学の有無）

学校レベルの変数としては、学校のタイプおよび、KS2 達成度、FSM 受給資格、SEN ステータス（スクールアクション、スクールアクションプラス、SEN 指定による段階的な支援を受けているかどうか）の生徒レベルの測定値を集計したものを使用した。予測因子として、自治体レベルの類似した集計値をテストした。採用した変数の定義と国勢調査の日付は、テクニカルレポート 2 に記載されている。

社会的養護児童とそれ以外の児童の間の教育成績の差は、NPD の分析で使われている KS4 の平均点（ベストの成績 8 つ）で測定された。6 ポイントが GCSE における 1 等級に相当し、科目で成績が D である生徒は、成績 C で取得されたであろうポイントよりも 6 ポイント低いことになる。さらに、KS4 の終わりにケアを受けていた児童のサブサンプルについては、CLAD がケアに入った年齢および理由、ケアシステム内での委託移動、各委託の種類と場所についての情報を提供した。これは、テクニカルレポート 2 で紹介する CLA に焦点を当てた分析で活用された。

#### サンプル - 定性的

このプロジェクトの定性的側面では、CLA の成果に関する最初の NPD 分析により、6 つの自治体が特定された。生徒の特徴を考慮した CLA 達成度の上位 25 位から 3 つ、下位 25 位から 3 つの自治体を選択した。選択基準として、規模（ただし、守秘義務を最大限に確保するため対象となるコホートには 20 人以上の CLA を含む）、行政タイプ（ユニタリー（単一自治体）、カウンティなど）、および地域性にある程度の多様性を持たせる必要があった。最初に選ばれた 6 つの自治体のうち、5 つは参加に同意し 1 つは辞退したが、5 つのうち 2 つは基準を満たす若者を特定できなかったため、表 2 に示すように、同様の特徴を持つ 3 つの自治体がさらに選ばれた。この 6 つの自治体はそれぞれ、2013 年の GCSE コホートから、KS2-4 の間に期待以上の成績を収めた若者 3 人と期待以下の成績を収めた若者 3 人の計 6 人を特定するよう求められた。バーチャルスクールの校長やソーシャルワーカーが、若者たちに参加の同意を求めめるために接触した。参加者の中には辞退する者もいて、代わりが見つからないこともあり、結果的に全部で 26 名の参加者となった。この中には、GCSE で期待以上の成績を収めた 14 人と、期待以下の成績を収めた 12 人が含まれている。データセット全体と同様に、面接を受けた若い女性 15 人のうち 11 人、若い男性 11 人のうち 3 人が「高進度グループ」に属していた。

表 2：定性的データに選ばれた自治体の特徴

自治体	行政のタイプ	地域	サイズ (人口)	CLA の成績が全体的に 高いか低い	若者の数
1	ユニタリー	NW	中	低	5
2	ユニタリー	SW	小	低	5
3	カウンティ	ミッドランド	大	低	4
4	メットボロー	NW	中	高	2
5	メットボロー	ロンドン	中	高	6
6	カウンティ	NE	大	高	4

それぞれの若者に、自分の教育を支えてくれた大人に我々が面接することを許可してくれるように依頼した。ソーシャルワーカー17名、里親17名、居住施設従事者1名、指定教師20名に面接を行った。養育者の中にはもうケアをしていない者もあり、ソーシャルワーカーも何人か異動していた。面接を受けた若者の中には、GCSE の時点で居住施設に住んでいた者はいなかったが、1名は以前に寄宿舎学校で過ごした経験があった。参加した自治体のバーチャルスクールの校長6人全員に面接を行った。若者への面接は、自らもケア経験のある訓練を受けたピア・インタビュアーが行い、面接の訓練を受けた里親が（主に里親）養育者への面接を担当した。合計で1,000ページを超える定性的データが作成された。調査結果を報告するにあたり、若者と自治体の匿名化を行った<sup>13</sup>。

12 環境価値付加とは、生徒の特性、学校の状況やタイプを計算に入れた指標で、学校と生徒のプロファイルを考慮した上で、ある学校が予想よりも良い結果を出しているか悪い結果を出しているかを示すものである。

13 若者はYP1、YP2などと示されている。YP1-YP14は期待以上の成果を上げた者、つまり「高進度」グループ、YP15-YP26は期待以上の成果を上げなかった者、つまり「低進度」グループである。ソーシャルワーカー、里親、教師はSW1、FC1、DT1などとなり、その数字は彼らが関係している若者の数字に対応している。バーチャルスクールの校長はVSH1-6である。



## データ分析

### 定量的分析

NPD と CLAD のリンク方法については、Web 上で公開されているテクニカルレポート 1 および 2 に詳細が記載されている。以下の知見報告では、分析に使用したモデルについて簡単に言及しているが、本報告書ではそれ以上の詳細は述べない。主に 2 つの分析を行った。

1 つめは、2012 年 9 月 1 日 時点で 15 歳だった NPD の児童全体を対象とした。CIN でも CLA でもない児童と、2013 年 3 月 31 日時点で CIN だった児童、その時点でケアを受けていた期間が 1 年未満の児童（CLA-ST、ケアを出入りする児童と「新規加入」の児童を含む）、およびその時点でケアを受けていた期間が 1 年以上の児童（CLA-LT）を比較した。これらの分析では、CLA、CIN の生徒とその同級生の KS2-KS4 の相対的な進歩に対する、様々な生徒の特性や学校・自治体の環境要因それぞれの寄与、および学校・自治体の影響の程度を推定するために、記述統計やマルチレベルモデリングを用いた（テクニカルレポート 1）。

2 つめの分析（テクニカルレポート 2）では、主に、2013 年 3 月 31 日 時点で 1 年間以上継続してケアを受けていた 4,849 人（CLA-LT）に焦点を当てたが、これはケアを受けている児童を行政的な目的のために定義する際の基準である。この分析では記述統計を行った後、ケアを受けている児童の個人特性や経験の複雑さを最もよく認識する形で、目的と目標にあるリサーチクエスションに取り組むべく、徐々に高度な分析を用いた。これらの分析には 4 つのステップがあった。

1. CLA-LT のサンプルについて、彼らの教育的成果と一般の児童の成果との間のギャップを説明する可能性のある特性を特に考慮して説明する。
2. 回帰モデルを用いて CLA-LT の教育的成果を予測する。
3. パスモデリングを用いて、ケアと教育の変数間の相互関係を調べ、異なる成果に対する予測因子を提案する。
4. マルチレベルモデリングを用いて、学校や自治体の違いがこれらの成果にどのように関係するかを検証する。

ここでは主な知見の一部を報告し、テクニカルレポート 1 および 2 で使用されたモデルをより広範にカバーするとともに、詳細な技術的説明を行っている。本報告書では、主な知見、「教育達成度のギャップ」に関連する個人の特性とケア要因、成果が異なる理由、および学校や自治体の果たし得る役割についてまとめている。

### 定性的分析

面接は、2 人の研究者によって順次分析された。分析にはあらかじめ設定された理論と、データから生まれたアイデアやコンセプトの両方を考慮に入れた、テーマ別のアプローチを用いた。これには帰納的アプローチ（Boyatzis, 1998）と演繹的手法（Crabtree & Miller, 1999）を取り入れた。データを整理するために予備的なコーディングプロセスが行われ、これらのコードからテーマが作成された。いくつかのコードは、文献レビュー、リサーチクエスションと理論的枠組み、ならびにテキストの予備的スキャンに基づいて、事前に特定された。

最初のデータの整理とコーディングには、NVivo ソフトウェアを使用した。次に、参加者のグループ（ケアを受けたことがある、または現在もケアを受けている若者、彼らの担当ソーシャルワーカー、彼らの養育者、彼らの教師またはその他の学校サポートスタッフ）の経験、6 つの自治体、社会経済的グループ、委託の種類（居住施設、非親族里親ケア、親族里親ケア）、および教育的進歩（試験の結果が予想以上に良かった、または予想以上に悪かった）などを比較した。最初に確認されたテーマは以下の通りである。

- 高い志（里親、教師、若者（YP）、ソーシャルワーカー、実親家族）
- 積極的な期待（里親、教師、YP、ソーシャルワーカー、実親家族）
- YP の特徴（「能力」、自信、決意、モチベーション）
- 一貫性のある人間関係（里親、ソーシャルワーカー、教師、友人、実親家族）
- 思いやりのある人間関係（里親、ソーシャルワーカー、教師、友人、実親家族）
- 目的達成に適した人間関係（里親、ソーシャルワーカー、教師、友人、実親家族）
- 生活史上のトラウマとなる出来事（虐待、ネグレクト、喪失）
- 最近のトラウマ的な出来事（実親家族との交流が難しい、実親家族との交流がない、親しい人の病気や死別、委託の崩壊など）
- 教育支援（個人教育計画、個人授業、小グループ、メンタリング、設備、リソース）
- 情緒面の支援（児童・青年メンタルヘルスサービス、学校でのパストラルサポート、人間関係、課外活動など）
- 学校、児童サービス、ケア（統合されている、信頼できる、十分なリソースがある、ニーズに対応している、よく組織されている）などのサービスの質
- ストレス（いじめ、スティグマ、頻繁な変化、移動、衝突、拒絶）

例えば、「ストレス」のカテゴリーに「暴力」と「性的搾取」を追加したり、「行動上の困難」「移行」「バーチャルスクール戦略」を追加カテゴリーとして追加したりするなど、分析中に多くのテーマを追加、削除、変更した。面接データは、理解が深まるように検討、比較、分類および概念化された。

## 主な知見

表 3 は、各グループの GCSE の平均ポイントスコアを示したもので、ここでは KS2 と KS4 の両方でケアを受けていた児童（必ずしも連続していない）と、2013 年 3 月 31 日 時点でケアを受けていたが KS2 終了後に初めてケアを受け始めた児童を分けている。

表 3：ニーズグループ別 KS4 平均ポイントスコア

	N	KS4 の平均点	SD
対照群（2012-13 年の CIN および CLA データベースに登録されていないもの）	622, 970	340. 59	87. 10
CIN グループ（CIN データベースに登録されているが、CLA に登録されていない児童）	13, 599	185. 14	141. 67
短期間の CLA（2013 年 3 月 31 日 時点で養護されていたが、継続して 12 ヶ月間に満たない児童）	1, 387	149. 52	128. 01
長期間の早期エントリーCLA（2013 年 3 月 31 日 時点で、KS2 を含めて 12 ヶ月間以上継続して養護されている児童）	2, 584	213. 89	134. 52
長期間の後期エントリーCLA（2013 年 3 月 31 日 時点で 12 ヶ月間以上継続して養護されているが、KS2 では養護されていなかった児童）	2, 265	185. 55	130. 93

要支援でありながらケアを受けていない児童は、要支援でなくケアも受けていない児童と比べて 155. 5 ポイント低く、これは 8 つの得意科目すべてにおいて平均で 3 等級以上低いことに相当する。

ケアが 12 ヶ月間未満の児童の成績は CIN よりもわずかに劣っていた（得意な 8 科目の結果で 36 ポイント、または GCSE 等級で約 6 等級）が、早期エントリーの CLA-LT は CIN よりも（28 ポイント、または GCSE 等級で 5 等級弱）高い成績を収めた。

## 英語と数学の成果の違い

数学と英語の GCSE スコアと GCSE 全体のスコアの間には、大きな違いはなかった。それぞれが単一のテストであり、有意な係数が少ないため、予測可能性は低くなった。当然のことながら、KS2 の英語スコアは GCSE 英語の成績の、KS2 の数学スコアは GCSE 数学の成績の圧倒的に優れた予測因子であったが、これは CIN や CLA であることの影響を推定する上では役に立たなかった。また、これらのモデルの係数は、GCSE スコア全体のモデルの係数とほぼ一致していた。

## リサーチクエスチョンへの取り組み

以下、それぞれのリサーチクエスチョンについて順に説明する。それぞれの質問に対して、NPD データセットから集団の背景に関する説明を、NPD および NPD と CLAD をリンクさせた分析結果とともに適宜示している。

リサーチクエスチョン 1-3 は、既存の文献レビューから得られた若者の特定の特徴とその経験に焦点を当てているため、以下の回答では、そのリサーチクエスチョンに直接関連する変数のみを使用した分析を行っている。

リサーチクエスト 4-7 は、教育の達成度と進歩の問題をより広範に検討するものであり、これらの疑問に答えるために、データ中のさまざまな変数や、研究の中で行われた定性的面接のデータを十分に活用した。

## リサーチクエスト 1：個人の特性（性別、民族、SEN、社会経済的地位）とケアを受けている児童の教育的成果との間には、どのような関連性があるのか (Flynn et al., 2013) <sup>14</sup>?

ケア経験の影響を受けない（性別など）、または受けにくい（社会経済的地位など）本人の特徴および幼少期の環境の特徴を調べた。このリサーチクエストに対する分析では、性別、民族、母国語、貧困、特別な教育的ニーズに関する変数に焦点を当てた。詳細はテクニカルレポート 1 と 2 に記載されている。

### 性別

CIN の集団と CLA-ST では、女子の比率がわずかに高かった。逆に、CLA-LT では男子の比率がわずかに高かった（55.8%、全コホートの 51.2%との比較）。行動的、情緒的、社会的困難を抱えていると評価される男子は女子よりもはるかに多く、また養護を受けている児童に多く見られることから、これは驚くべきことではない。女子と男子の KS4 の成績の差は、CLA の滞在期間の短いグループで特に大きく（81 点）、対照群（CIN でも CLA でもない）でははるかに小さい（25 点）ことがわかった。これらの関連性は高度に有意であったが、成績に関するグループの順位は、女子も男子も同じであった。男子と女子の差が最も少なかったのは対照群、次に少なかったのは CLA-LT 群、次に CIN 群、そして最も差が大きかったのは CLA-ST 群であった。

### 民族

NPD の分析結果（テクニカルレポート 1）によると、CLA または CIN の児童の中で、アジア系およびブラック・アフリカ系のグループの割合は低いものの、ブラック・カリビアンや白人とブラック・カリビアンの混血（MWBC）の子どもたちの数が偏って多く、特に養護を受けているグループに多く見られた。CLAD 分析（テクニカルレポート 2）で他の変数を計算に入れたところ、CLA の生徒の KS4 のスコアを予測する上で、民族性は有意な予測因子ではなかった。

### 家族の貧困

要支援児童は、ケアを受けてなく要支援でもない児童と比べて、学校給食の無償提供を受ける割合ははるかに高く、貧しい家庭の子どもはこうしたサービスを必要とするリスクが高いことを示している。

表 4：無料の学校給食を受ける資格 (Ever 6<sup>15</sup>)

グループ	無料の学校給食を受ける資格がない		無料の学校給食を受ける資格がある	
	カウント	%	カウント	%
2013年3月31日時点で要支援ではなく養護もされていない	478,027	76.7%	144,943	23.3%
2013年3月31日時点で要支援	5,717	42.0%	7882	58.0%
2013年3月31日時点で1年間未満の養護	655	47.2%	732	52.8%
2013年3月31日時点で1年間以上の養護	3,073	63.4%	1776	36.6%

コホート全体では、FSM の資格を持つ児童は 4 分の 1 以下であったが、要支援児童と CLA-ST の子どもでは半数以上が FSM の資格を有していた。FSM 資格者の割合は CLA-LT では 3 分の 1 強であったが、彼らの家庭がより豊かであるというよりも、特定のタイプの学校が過少報告していることがその理由であると考えられる（表 4 の脚注を参照）。

実践者との初期の会話から、FSM が社会的養護児童にとって妥当な指標であるかどうかについて疑問があった。FSM は児童の現時点での委託や出身家庭によって変わるものだと考えられるからである。データからは、このような疑念は 2 つの理由から過大評価されたものであることが示唆される。すなわち、養護されている児童は FSM である可能性が非常に低いこと（里親の承認に財務アセスメントが含まれている）、および FSM が単なる「ノイズ」であれば考えられないような形で成果に有意に関連していることである。

FSM6 変数（上記の表 4 で定義されている）に加えて、KS1（7 歳）と KS4 の両方で FSM ステータスを調べ、早期および該当期の貧困が果たす役割を検討した。表 5 に示すように、4 つのニーズ・ステータス・グループすべてにおいて、KS4 での FSM 受給資格は有意な影響を及ぼしており<sup>16</sup>、この変数とグループ・ステータスの間に相互作用があった<sup>17</sup>。KS4 の時点で FSM を受けているかどうかで、CIN の KS4 のスコアにはほとんど差がなかったが、他の 3 つのグループでは、FSM を受けている児童や若者の方が成績不良であった。また、KS1<sup>18</sup> での FSM 受給資格も有意な影響を有しており、この変数とグループ・ステータスとの相互作用も見られた<sup>19</sup>。CLA-LT の場合、要支援でも擁護中でもない児童と異なり、KS1 で FSM を受けていても KS4 の成績にはほとんど影響しなかった<sup>20</sup>。

14 それぞれのリサーチクエスションは、リサーチフォーカスに影響を与えた先行研究の参考文献とリンクしている。

15 GCSE に先立つ 6 年間のいずれかの期間において、無料の学校給食を受ける資格があるか否か。この比率は、CIN と CLA の FSM 受給レベルを過小評価している可能性がある。これは、CIN と CLA の割合が高い学校がデータを提供しなかった場合、児童は NPD に受給資格がないと記録されたためである。

16  $F(1, 574737) = 307.06, p < 0.001, H2 = 0.001$

17  $F(3, 574737) = 387.89, p < 0.001, H2 = 0.002$

18  $F(1, 565143) = 172.42, p < 0.001, H2 < 0.001$

19  $F(3, 565143) = 429.67, p < 0.001, H2 = 0.003$

20 CLA の FSM と GCSE の成果の関係の強さは、分析によって異なる。これは、一つには特定の学校タイプ（CLA の数が偏っている）の生徒の資格が NPD に十分に記録されていないことと、無料学校給食の資格が他の児童よりも CLA の場合、時間とともにより変化することが一因であると考えられる。前者は、CLA の指標としての FSM の信頼性を低下させ、後者は、FSM が安定した家庭の貧困の指標であるという推論が、このグループには適切でないことを示唆している。

表 5 は、KS4 で FSM を受ける資格のある者となない者を区別して、各グループの達成度を示したものである（ステータスが判明している場合）。全体として CLA-ST のスコアが最も低く、次いで CIN、CLA-LT の順であった。FSM 資格がない場合、CIN と CLA-ST の差は小さかったが、これら 2 つのグループと CLA-LT グループの差は有意であった。

表 5：KS4 の平均得点（および SD）、ニーズグループおよび KS4 での FSM 受給資格別

	CIN でも CLA でもない	CIN	CLA / 12 ヶ月間未満	CLA / 12 ヶ月間以上
FSM	300.70 (100.32) N = 81,340	195.01 (137.04) N = 5,801	168.71 (129.82) N = 469	206.62 (133.78) N = 483
FSM ではない	352.18 (72.07) N = 476,538	197.18 (146.30) N = 6,384	191.64 (130.29) N = 539	243.90 (123.15) N = 3,191

家族の貧困を表すもう一つの指標は、児童が住んでいる地域の郵便番号に関連した貧困度の指標である IDACI (Indicators of Deprivation Affecting Children Index) である。表 6 は、4 つのキーステージで児童が住んでいた地域の IDACI スコアを示している。KS1 (2004 年)、KS2 (2008 年)、KS3 (2011 年)、KS4 (2013 年) の順になっている。IDACI のスコアを時系列で比較することで、児童の教育歴における様々な時点での居住地域の貧困レベルの変化を知ることができる。この表によると、2013 年に CLA-LT が住んでいた地域は、要支援ではない児童とほぼ同程度の豊かな環境であった。しかし IDACI スコアの経年変化を見ると、別のストーリーが見えてくる。

表 6：子どもに影響を与える所得貧困指数 (IDACI) 2004-2013 年

グループ	2004	2008	2011	2013	2004-2013
2013 年 3 月 31 日時点で要支援でも養護もされていない	0.221	0.229	0.219	0.217	0.217
2013 年 3 月 31 日時点で要支援	0.306	0.311	0.291	0.288	0.293
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間未満の養護	0.326	0.326	0.301	0.254	0.271
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間以上の養護	0.327	0.287	0.238	0.219	0.234

2004 年から 2013 年の間に、CIN と CLA (両グループ) の IDACI スコアの平均値は大幅に改善（すなわちスコアが減少）した。初期（平均）の貧困度は養護を受けている群が最も高く、コホート全体の平均値への収束は CLA-LT で最大となっている。妥当な推論としては、養護されていた児童は（平均的に）貧困層の家庭出身であったが、CLA-LT は最終的にほぼ平均的な貧困度の地域において委託を受けるに至ったと考えられる。IDACI は、CLA-LT の実親家族の貧困を示す指標として、2013 年よりも 2004 年においてより優れていると考えるのが妥当だと思われる。別の学校国勢調査における近隣貧困化の指標間のさらなる相関関係は、児童がケアを開始する際に居住地を変更することと、委託の性質が実親家族の貧困とはほとんど関係がないことと一致している。

KS4 の結果に関連して、KS1 と KS4 における児童の IDACI スコアという 2 つの近隣貧困化の指標に注目した。KS1 および KS4 での IDACI と KS4 における結果との相関係数を調べた。

予想通り、要支援でも養護中でもない児童と若者については、貧困の度合いが大きいほど結果が悪くなった。要支援児童については、貧困度が高いほど結果が良いという直感と相容れない結果が得られた。彼らはより多くのサポートを受けることができるからという可能性はあるが、どちらにしてもエビデンスがない。両グループの社会的養護児童では、早期の IDACI および該当時期の IDACI の両方とも、KS4 スコアとの関係は有意でないか、非常に小さいものであった。

## 特別な教育的ニーズ

要支援または養護されている児童に共通する特徴の一つとして、特別な教育的ニーズ（SEN）を持つ児童の割合が高いことが挙げられる。表 7 によると、CIN でも CLA でもない児童の場合、スクールアクションプラス<sup>21</sup> で SEN を有している、または特別な教育的ニーズ（SEN）の指定を受けている割合は 16% 近くであったが、CLA-LT の場合は 70% 以上、2013 年 3 月 31 日時点で要支援であると判断された児童や CLA-ST の場合は 60% 近くになった。

21 この調査は、新しい「教育・健康・ケア計画」や、従来の用語である BESD に代わる「社会的、情緒的、およびメンタルヘルス上の困難」という用語に先立つものであった。

表 7：特別な教育的ニーズに関するレベル別の養護状況

グループ	特別なニーズはない	スクールアクション	スクールアクションプラス	特別なニーズの指定	合計
2013 年 3 月 31 日時点で、要支援でなく養護もされていない	64.8%	19.5%	12.3%	3.4%	100%
2013 年 3 月 31 日時点で、要支援である	23.3%	17.7%	27.4%	31.6%	100%
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間未満の養護を受けている	21.0%	17.8%	40.3%	20.9%	100%
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間以上養護を受けている	13.5%	14.9%	41.3%	30.3%	100%

表 8 は、特別な教育的ニーズがあった児童の SEN の主なタイプ別内訳を示している。割合の絶対差が最も大きいのは「行動的および情緒的困難」であるが、相対的傾向をみると、「特定の学習障害」と「発話、言語、またはコミュニケーション上のニーズ」で、より顕著な違いがみられる。これらのケースでは、SEN を持つ児童におけるこれらのニーズを有する者の割合は、要支援でなく養護もされていない児童の方がはるかに高い。逆に、要支援でなく養護もされていない児童の 4 分の 1 強が行動的、情緒的、社会的困難を抱えていたのに対し、養護されている児童の場合は半分以上であった。

コホート全体を分析した結果、KS4 のスコアが最も悪かった主要な SEN タイプは、BESD(行動的、情緒的、社会的困難)、中等度の知的障害、自閉症スペクトラム障害、重度または重複の知的障害の 4 つであった。表 8 によると、SEN が確認されたすべての児童のうち、これら 4 つの特別なタイプのニーズを持つ児童は、多くの場合、要支援であるかケアを受けている。これは、自治体が「健康または発達の合理的な水準を維持する」という義務のもと、重大な教育的ニーズを有している児童を要支援として分類する一方、ケアに入れるのは重大な行動上の困難を抱える児童であることとも一致している。

これらのデータからは分からないのは、これらのタイプのニーズ（特に BESD）の中で、CIN と CLA のニーズが他の児童よりも大きい傾向にあるのかどうかということである。

表 8：各グループの SEN\*を持つ児童の、SEN のタイプ別の養護状況  
（割合が相対的に大きく異なる列では、高い割合を網掛けで強調している）

グループ	行動・情緒・社会	中等度の知的障害	特定の学習障害	発話・言語・コミュニケーション	自閉症スペクトラム障害	感覚障害	重度または重複の知的障害	身体的およびその他の障害	合計
2013年3月31日時点で要支援でなく養護もされていない	28.2%	26.4%	15.8%	9.9%	6.6%	3.1%	1.8%	8.1%	100%
2013年3月31日時点で要支援	32.0%	18.0%	5.7%	3.9%	12.3%	2.3%	16.7%	9.0%	100%
2013年3月31日時点で1年間未満の養護	58.7%	17.0%	4.8%	2.5%	5.4%	1.7%	4.8%	5.2%	100%
2013年3月31日時点で1年以上の養護	50.4%	19.8%	5.2%	3.8%	5.4%	1.0%	6.5%	7.9%	100%

\*この表には、SEN と認定された子どもたちのみが含まれている。

NPD の分析によると、CLA は特別な教育的ニーズのほとんどのカテゴリーに多く含まれており、このことが KS4 における成果の悪さに関係していると考えられる。表 9 は、各グループの児童の KS4 ポイントの平均値を、SEN があると認識されていない児童のポイントと比較したものである。全グループの中で割合が低いため、この表では「感覚障害」と「身体的およびその他の障害」のカテゴリーを統合している。

表 9：グループおよび主要な SEN タイプ（最大の提供を受けた時期）別の KS4 平均点（および SD）

	CIN でも CLA でもない	CIN	CLA / 12ヶ月間未満	CLA / 12ヶ月間以上
SEN なし	356.27 (70.60) N = 497, 132	269.44 (117.83) N = 5, 270	207.17 (129.26) N = 462	271.08 (118.88) N = 1, 272
行動・情緒・社会	233.39 (123.17) N = 28, 195	156.01 (124.68) N = 2, 878	119.06 (115.8) N = 575	185.40 (126.18) N = 1, 859
中等度の知的障害	254.00 (105.95) N = 24, 430	151.37 (118.68) N = 1, 406	139.06 (112.26) N = 140	187.73 (116.58) N = 668
特定の学習障害	290.49 (88.45) N = 14, 676	202.92 (120.78) N = 452	153.55 (108.93) N = 35	228.97 (114.79) N = 176
発話・言語・コミュニケーション	289.72 (97.51) N = 9, 243	172.68 (125.56) N = 310	154.85 (136.33) N = 18	204.87 (118.10) N = 128
自閉症スペクトラム障害 (ASD)	260.71 (125.20) N = 6, 195	98.79 (122.04) N = 992	80.92 (114.39) N = 45	82.90 (112.07) N = 186
重度または重複の知的障害	101.74 (124.60)* N = 1, 698	13.12 (38.76) N = 1, 336	20.59 (39.03) N = 40	24.71 (58.27) N = 224
身体的、感覚的、その他の障害	298.54 (102.41) N = 10, 510	187.68 (138.21) N = 911	182.37 (127.40) N = 59	254.83 (119.02) N = 302

\*標準偏差からもわかるように、これらの生徒の中には GCSE のスコアが非常に高かったと記録されている生徒が少数おり、これらの生徒が誤って認識されていた可能性がある。



主要な SEN タイプ<sup>22</sup>、およびこの変数と CIN および CLA のグループ・ステータスとの間の相互作用は大きな影響を有していた<sup>23</sup>。ほとんどのタイプの SEN について、要支援でなく養護もされていない児童および若者は、他の 3 つのグループよりも良い成績を示した。CLA-LT の成績は要支援児童をわずかに上回り、要支援児童の成績は 2013 年 3 月 31 日時点で 12 ヶ月間未満の養護を受けていた児童よりも良かった。しかし、ASD や重度または重複の知的障害を持つ児童の成績は、要支援か養護を受けているかにかかわらず、要支援でなく養護もされていない児童と比べて同じように悪かった。長期ケアを受けている ASD の児童は、ASD であるがケアを受けておらず要支援とも認識されていない児童よりも、GCSE のスコアが平均で 178 点低かった。

## リサーチクエスチョン 1 に関する知見のまとめ

全体的に、データはジェンダー（男性であること）およびいくつかの SEN（ASD、BESD、重度/重複の知的障害）が、社会的養護児童における KS4 スコアの低下と関連していることを示唆している。KS1 での社会経済的に不利な状況は養護される状態になることと関連しているが、このサンプルでは教育的成果とは関連していない。CLA-LT の CLAD 分析（テクニカルレポート 2）では、KS1 での FSM や IDACI による不利な状況は、どちらも KS4 での達成度スコアの有意な予測因子ではなかった。英語以外の言語を母国語とすることや民族性は、要支援児童またはケアを受けている児童の KS4 スコアとは関連しなかった。

22  $F(7, 611791) = 1128.08, p < 0.001, H2 = 0.013$

23  $F(21, 611791) = 67.46, p < 0.001, H2 = 0.002$

**リサーチクエスチョン 2：ケア期間が長いほど達成度が高いという知見（DfE, 2013）は確かなものなのか、それともケアを開始した理由や開始した年齢によって説明されるものなのか（例えば、あとからケア制度に入った児童は、異なる行動上の問題や関連する問題を抱えている）？**

このリサーチクエスチョンについては、CLAD の変数のうち、若者のケア期間の合計（DfE の基準に従い短期のレスパイト委託を除く）、年齢、最初にケアに入った理由に関連するものに焦点を当てた。

ケア期間の長さは KS4 の成績に関係していたが、すべての児童について有意ではなかった。図示しやすいようにケア期間を 3 分割しているが、ここで報告されている相関関係はすべてケア期間（レスパイトを除く）の連続変数を使用している。大まかに言うと、3 つのグループはケア期間 2 年（743 日）、ケア期間 5 年（1933 日）、ケア期間 11 年（3954 日）の平均値を表している。ケア期間（レスパイトを除く）と KS4 の点数には相関関係があった<sup>24</sup>。有意ではあるが、その関係は実質的なものではなかった。しかしデータを詳細に検討すると、その関係は曲線関係にあることが示唆された。つまり連続変数を 3 分割すると、KS2 の結果を揃えても、中長期的にケアを受けていた児童の KS4 のスコアには差がないものの、短期的にケアを受けていた児童よりも両者のスコアが良いことがわかった。

また、初めてケアに入った年齢および記録されているケア開始の主な理由を計算に入れて「キャリアタイプ」の指標を作成し、これらのカテゴリーに属する若者の KS4 のスコアを比較した。KS2 ポイント（つまり過去の達成度）と、ケアを受けていた人の場合はケアを受けていた期間の合計を揃えた推定平均値を用いて、各グループの KS4 ポイントの比較を行った。表 10 では、各グループの進歩を比較するとともに、ケア期間を計算に入れた場合の各グループに対する相対的な重要性を検討している。2 列目から 3 列目へのスコアの変化が少ない（UASC グループに見られるように）場合、このグループの若者については、KS2 スコアを使うことに加えてケア期間の合計を計算に入れても、GCSE 等級を予測する能力にはほとんど差がないことを示している。

対照的に、最初の 2 つの年齢グループのスコアが「下方」にシフトし、2 つの青年グループのスコアが「上方」にシフトしていることは、ケアを受けていた期間の長さが、それまでの達成度の違い以上にこれら 2 つのグループの相対的な成績の良し悪しを説明するのに役立つことを示している。

表 10：ケアキャリアの種類別の KS4 ポイントの推定平均値（および標準誤差）

	KS2 を揃える	KS2 とケア期間を揃える
	KS4 ポイントの平均値	KS4 ポイントの平均値
1. 0-4 歳のエントリー	225.452 (4.414)	202.920 (6.922)
2. 5-9 歳のエントリー	230.604 (3.044)	223.662 (3.455)
3. 青年期のエントリー（虐待・ネグレクト）	213.961 (3.500)	224.983 (4.362)
4. 青年期のエントリー（その他の理由）	181.725 (3.754)	194.365 (4.797)
5. 同伴者のいない亡命希望者としてケアに入った（UASC；年齢不問）	338.418 (24.581)	337.306 (24.534)
6. 障害によりケアを開始（年齢不問）	128.565 (7.593)	134.16 (7.693)
7. 要支援児童	249.768 (0.627)	該当なし
8. ケア中でも要支援でもない	341.660 (0.092)	該当なし

「障害者<sup>25</sup>」のグループは成果が最も劣っていたが、これは彼らの 40%が学習能力の制約となる重度または重複の知的障害に分類されていたことによると思われる。UASC のスコアは、要支援でなくケアも受けていない児童のスコアとほぼ同じ程度に高いが、彼らは当初、外国語および馴染みのないシステムで教育を受けるという不利な状況から始めている可能性が高い。しかし、彼らの多くには頑張ろうとする意欲があり、また、トラウマを抱えていたり現状に関連した悩みを抱えていたりするものの、他のグループに深刻な影響を与えているような家庭の事情を経験していないことが多いのである。面接に応じてくれたある青年は亡命希望者として入国したが、ケアを受けていることは、汚名を着せられることなく、よりよい生活を送るチャンスや自己改善の機会を与えられた特権だと考えていた。

10 歳未満でケアを開始した 2 つのグループは、ケア期間の影響を揃えるまでは、2 番目に良い結果であった。障害者のグループを除くと、10 歳以降に虐待以外の理由で入所した児童の平均スコアが最も低くなっている。ケアの現場では、問題を解決するのに十分な時間が取れないことが多い。

KS2 スコアのみを揃えると、主に虐待的な環境からケアに入った児童（カテゴリー 1、2、3）の方が、コミュニティでの管理が困難なために紹介された青年期のケア開始者（カテゴリー 4）や、障害を理由にケアを開始した少数のグループ（カテゴリー 6）などよりも、成績が良い傾向にある。エフェクトサイズをみると、ケア期間よりもキャリアタイプの方が説明力が高い<sup>26</sup>が、どちらも有意であった。それまでの達成度（KS2 スコア）を揃えることで、個人の特性（行動や障害）は KS4 成績低下のリスク要因となり得るが、それは児童がケアを受けていた期間にもよる。青年期のケア開始者の成績が悪いのは、個人の特性が大きく関係しているようである。しかし、ケア期間が長く情緒面や行動面での問題に対処する時間があれば、より良い結果が得られたかもしれない。

ケア開始時の年齢と KS4 の結果には関係があったので、これによってケア期間と KS4 の結果に小さな相関があることを説明できるかもしれない。これは、9 歳以上でケアを開始した児童が、開始時期が早ければ早いほど成績が良かったことによるものである。10 歳未満でケア開始した児童は、幼少時に開始し、いったんケアを離れた後に戻ってきて、合計で 2 年間程度しかケアを受けていない場合には最低の結果となったが<sup>28</sup>、中程度の期間（平均 5 年）ケアを受けている場合にはそれよりも良好な結果となった。

24  $R(4847) = .109, P < 0.001$

25 障害は、SEN (ASD、知的障害などを含む) とは別のカテゴリーであり、常に SEN と関連しているとは想定されていない。

$P = 0.042$

$P = 0.004$

28 この所見を完全に検証するには、さらなる分析が必要である。

しかし、超長期ケアグループ (合計で平均 11 年間) はあまり良い結果が得られなかった。これは、最初の 5 年間で児童がより良い進歩を見せるが、その後、その影響が低下したためと考えられる。この説明は、最長で 5 年間ケアを受けていた児童では、ケアを受けていた期間が長いほど KS4 のスコアが良かったという事実と一致する。あるいは、このようなケア期間との見かけ上の関係は、ケアシステムを離れる児童と継続する児童との間の違いによって説明できるかもしれない。例えば、長期ケアグループでは「成績の良い」児童は家に戻っているか、養子縁組をしているか、特別後見命令を受けている可能性がある。

面接した 26 人の若者たちは、最も早い者で 3 歳、最も遅い者で 16 歳と、人生のさまざまな段階でケアを開始していた。低進度グループの 14 名の若者のうち 4 名は、10/11 学年 (14-16 歳) でケアに入っていた。高進度のグループではそのような者はいなかった。

彼らや彼らのケアおよび教育に関わる大人たちは、幼少期の経験が後の成長や学校生活にいかにか大きな影響を与えるかを強調していた。例えば、予想以上に成績が悪かったある若者のコメント：

... 父はよく虐待してきました... 「お前は学校に行っている。俺とは違う」と。今振り返ってみると、それが影響しています... 自分が存在していないかのようです。夜きちんと眠れず、頭からつま先まで兄とベッドを共有していたので、私はいつも疲れていていました。朝食もありませんでした。(YP25)

面接を受けた者の間では、養護されたことが教育に良い影響を与えたという意見が圧倒的に多かった。変わらなかったと感じた者もいたが、開始後に学校生活や達成度が低下したと感じた者は一人もいなかった。養育者や専門家もこのような意見を持っていた。このような変化には、有害なペアレンティングから守られていること (「怒鳴られない」 [YP20])、落ち着いた生活を送っていること、励ましやサポートを受けていること、コンピュータ機器などのリソースが充実していることなど、いくつかの要因があると若者たちは考えている。

テクニカルレポート 2 では、CLA-LT の回帰モデルにおいて、リサーチクエスチョン 2 で使用した変数をリサーチクエスチョン 1 で使用した変数に追加した場合、予測因子と KS4 の結果の間のほとんどの有意な関係が維持されることを示している。

## リサーチクエスチョン 2 に関する知見のまとめ

DfE (2013) のデータパックによると、ケアを受けている児童は、キーステージ 2 と比較してキーステージ 4 では同世代の児童よりも相対的に成績が悪い (つまり、下記のリサーチクエスチョン 6 で取り上げているように、すべての児童との差が広がる) が、ケアを受けている期間が長いほど、成績は良くなることが示唆されている。ここでの分析では、これはケア開始年齢と開始理由によるものであることが示唆されている。9 歳以上のケア開始者は、開始時期が早いほど良好であった。10 歳未満でケア開始した者は、幼少時に開始し、いったんケアを離れた後に戻ってきて、合計で 2 年間程度しかケアを受けていない場合には最低の結果となった (この点を完全に検証するには、より多くのデータが必要である) が、ケア期間が中程度 (平均 5 年) であれば、それよりも良好な結果となった。

しかし、超長期ケアグループ（合計で平均 11 年）は、あまり良い結果を得られなかった。面接によると、ケアに入る年齢、ケアの期間および教育的成果の間の微妙な関係の一因は、ケアの正確なパターンがどうであれ、早期の虐待やネグレクトの長引く影響が障壁となっている若者がいるためだと考えられる。

このような統計的知見が出た理由は、他にもいくつか考えられる。

- 初めてケアに入る青年たちは、虐待やネグレクト以外の理由で入ってくるものが多く、教育面でもうまくいかないことが多い。
- これらの青年たちは、恩恵が形になるまでの時間が十分ではなかった。
- 若くしてケアを開始した「成績の良い」児童の中には、成功裏に実親家族に戻ったり、特別後見になったり、養子縁組をしたりして、ケアシステムを離れた者もいるのかも知れない。
- 早期に開始し、長期にわたってケアを受けている児童は、最初の 5 年間でより良い進歩を遂げたが、その後その影響が薄れていく。

### リサーチクエスチョン 3：委託の安定性と学校の安定性は同じように高い達成度と関連しているのだろうか (Conger & Rebeck, 2001) ?

先行研究（例：Conger & Rebeck, 2001）では、委託の変更と転校は、いずれも教育的成果の低下と関連することが示唆されている。NPD の分析（テクニカルレポート 1）によると、要支援でなくケアも受けていない児童のうち、平均して約 3% が中等学校で転校している。CLA-ST では 4 倍以上の 16%、CLA-LT では 12%、要支援であるがケアを受けてない児童では 9% 程度となっている。相関分析によると、CLA-LT の場合、学校教育の後半に行われた転校の方が早い時期に行われた転校よりも、KS4 のスコアとの関係が強かった。これらの関係は 10 または 11 学年（14-16 歳）で最も強く、次点が 9 学年であった。

表 11：CLA-LT における転校と KS4 ポイントとの相関関係

	<i>n</i>	<i>r</i>
9 学年で転校	4371	-0.102***
10 または 11 学年で転校	4847	-0.154***

慢性化の影響は、非レスパイト委託の変更についても同様であった（KS4 での変更が最も強い相関を持ち、次点が KS2 の終わりから KS4 の開始までの間に起こった変更であった）。

表 12：CLA-LT における委託変更と KS4 ポイントの相関関係

	<i>n</i>	<i>r</i>
委託の変更 KS2-KS4 の開始時	4847	-0.185***
KS4 における委託の変更	4847	-0.237***

また、これらの学校や委託の不安定性の尺度は互いに相関していることがわかった。このことから、委託の変更が転校につながり、ひいてはそれが成果の悪化につながるものがどのくらいあるのかという疑問が生じる。委託の変更と KS4 ポイントの関係は、10 または 11 学年での転校を計算に入れても有意なままであったが、ソーベル検定により、この関係の強さの減少が有意であることが示された<sup>29</sup>。つまり、有意な部分的媒介効果があったということである。10、11 学年での転校はあまり頻繁ではなく、委託の変更よりもはるかに稀なものであった。そのため、転校だけでは委託の不安定性と成果の関連性を完全には説明できない可能性が非常に高い。また、転校は主流校（9%）では他のタイプの学校（15%）よりも少ない<sup>30</sup>。非主流校（生徒紹介施設や代替施設など）の成果が非常に悪いことを考えると、この関連性は、転校が成果に与える見かけ上の影響を大きくする可能性がある。

CLA-LT グループの 39% (1876 人) は、KS4 終了時に非主流校に在籍していた。表 13 は、主流校における委託変更、転校、成果の関連性を示しており、表 14 は非主流校での関連性を示している。この 2 つの群を区別したのは、一つには上述の関連性のためでもあるが、この 2 つのケースでは転校の意味が異なる可能性があるからである。主流校では、委託変更によって転校がもたらされることもある。非主流校では、これを反映していることもあるが、再アセスメントと移管—たとえば教育面ですでに悪い成績をとっていた児童が生徒紹介施設に移される—による転校を反映している可能性がある。

表 13 : CLA-LT における KS2 後の委託変更および 10 または 11 学年での転校 (主流校) による KS4 ポイント (および標準偏差)

	KS2 以降の委託変更の程度		
	低 (3 回未満の変更)	中 (3-4 回の変更)	高 (5 回以上の変更)
10 または 11 学年で転校した			
はい: 転校した	228.062 (114.354)	246.373 (103.118)	162.213 (112.980)
いいえ: 転校しなかった	299.614 (83.910)	258.648 (108.233)	207.162 (123.209)

29  $T = -6.590, P < 0.001$

30  $\chi^2(1) = 52.49, P < 0.001$

表 13 によると、安定性とより良い成果との関係は、KS4 の終わりに主流校にいる若者で明らかである。KS4 の間に転校しなかった児童は、KS2 以降のケア委託の回数が増えるにつれて、KS4 のポイントが明らかに減少していた。また KS4 で転校した児童は、ケア委託の変更回数が少ないほど GCSE スコアが高かった。委託変更の回数が 3-4 回の児童の達成度が高いのは、委託変更の回数が少ない児童がケアシステムにごく最近参加したばかりの児童であるとすれば説明できるかもしれない。

定性的な面接では、ソーシャルワーカーが委託の変更は教育的進歩を妨げると報告している。例えば、8 年間里親委託で生活していたある若者は、11 年生のイースターの時に、試験が終わったら養育者が引退するので引っ越さなければならないと知らされた。彼のソーシャルワーカーは状況を鑑みて彼へのサポートを強化したが、彼と後任の養育者はどちらも試験結果が影響を受けたことを認めていたと述べた。「ちょっと頭が混乱して、予想していた成績が取れなかった」(YP15)。Taylor and McQuillan (2014) は、委託変更は青年期や期間が 1 年未満の委託でより多く見られ、このような変更の影響下ではサポートの果たす役割が大きいことを確認している。

転校も、若者にとっては非常にストレスの多いものと報告された。面接したサンプルの半数弱がタクシーで通学していた。一般的な意見としては、タクシーを利用するには早起きしなければならないことが多く、通学時間が長くなるが、生活を中断させるような状況に直面しても友人と一緒にいられるので、不便ではあるが価値があるというものだった。しかし、タクシーの手配にはいくつかの問題があった。例えば、タクシーが相乗りであったため、課外活動やテスト勉強のために学校に残ることができない若者がいた。

表 14 : CLA-LT の KS2 後の委託変更および 10 または 11 学年での転校（非主流校）による KS4 ポイント（および SD）

	KS2 以降の委託変更の程度		
	低（3 回未満の変更）	中（3-4 回の変更）	高（5 回以上の変更）
10 または 11 学年で転校した			
はい：転校した	90.528 (85.914)	91.065 (86.035)	74.407 (75.076)
いいえ：転校しなかった	83.743 (89.626)	99.045 (86.709)	84.592 (79.725)

表 14 に示すように、KS4 で非主流校に通っていた生徒の場合、委託変更と GCSE の結果との関係はあまり明確でない。また、成果と転校との関係も一貫していない。これは、このような異なる状況下で転校することになる理由を反映しているのかもしれない。

転校が必然的に悪い影響を与えるということを示唆するものではない。

例えば、学校での成績が良くないために転校することもあり得るが、その場合、転校の原因となるのは成績であり、転校が成績を悪くするわけではない。委託変更や成績の悪さのどちらも、後述する SDQ スコアの高さなど他の要因と関連している。

面接から得られたエビデンスは、若者と周囲の大人、特に養育者との関係における一貫性が重要であることを示唆している。高進度グループのほとんどは、安定した長期の里親委託のもとで生活していた。低進度グループの一部も安定したケアを受けていた。したがって、安定性は必要条件だが十分条件ではない。ソーシャルワーカーは一般に、委託の安定性が教育上のメリットをもたらすことを強調している。「...安定していること、そして安心できる家があること.....それが子どもたちに大きな違いをもたらします。先ほども言ったように、[名前]はこの里親としか暮らしたことがなく、他の場所で暮らしたことはありません。それが役立っています」(SW3)。

不安定性のもう一つの特徴は、児童が身を置く最終的な委託の種類と関連している。表 15 に見られるように、里親ケアと親族ケアはいずれも委託変更の少なさと関連している。対照的に、居住施設での委託はどのような形態でも、より頻回の KS2 以降の委託変更と関連している。この関連性は、原因と結果を表している可能性が高い。居住施設にずっといた児童は、最終的に居住施設でのケアとなった児童のごく一部に過ぎず、彼らの委託は里親委託に失敗した結果、このような高額なケアを利用することになったことを反映していたと考えられる。さらに、居住施設の従事者には、一部の若者が里親ケアのもとで恩恵を受けたような長期的な一貫性を提供することはできないであろう。

表 15 : KS4 での 5 つの委託形態における KS2 以降の委託変更の回数

KS4 での委託形態	KS2 以降の委託変更の程度		
	低（3 回未満の変更）	中（3-4 回の変更）	高（5 回以上の変更）
親族ケア	321 (81.3%)	49 (12.4%)	25 (6.3%)
里親ケア	2095 (72.6%)	464 (16.1%)	327 (11.3%)
居住施設（児童養護施設）	305 (33.9%)	228 (25.3%)	368 (40.8%)
その他の居住施設*	183 (46.0%)	69 (17.3%)	146 (36.7%)
その他の委託**	98 (36.7%)	69 (25.8%)	100 (37.5%)

\*例：寄宿舎学校、セキュア・ユニットなど。

\*\*例：ケアされているが実親と一緒にいる、自立した生活をしている、など

表 16 は、最終的な委託（つまり KS4 終了時）と成果を示している。当然のことながら、安定性と委託形態の組み合わせが成果と強く関連していた。このように親族ケア、里親ケア、その他の委託において、KS2 以降の委託変更の程度と教育的成果との間にはほぼ一貫した関係が見られる。予想されるように、変更の程度が低いほど、良い成果が得られているようである。

表 16：KS2 後の委託変更と KS4 での委託形態別の KS4 ポイント（および SD）

KS4 での委託形態	KS2 以降の委託変更の程度		
	低（3 回未満の変更）	中（3-4 回の変更）	高（5 回以上の変更）
親族ケア	266.993 (116.275)	230.582 (124.146)	215.560 (107.594)
里親ケア	257.465 (116.439)	242.424 (110.182)	185.902 (124.527)
居住施設（児童養護施設）	94.485 (110.339)	131.549 (118.330)	100.465 (95.381)
その他の居住施設	64.508 (93.745)	93.254 (89.972)	88.601 (82.037)
その他の委託	213.319 (126.143)	132.823 (121.354)	90.628 (102.811)

児童養護施設やその他の居住施設での委託ではパターンがあまり明確でないが、最近ケアを開始し、そのため委託を変更する時間が少なかった若者ほど居住施設でより大きな困難を経験していることを反映しているのかもしれない。表 16 は、大きな違いは委託の種類間で生じることを示している。居住施設でケアを受けている児童の成績はどう見ても劣っており、教育からドロップアウトした児童もいたであろう。どちらのグループも教育上の支援を必要としているが、教育上の問題の性質は同じではないかも知れない。

## 出席と退学

要支援児童または社会的養護児童の教育における不安定性が大きいもう一つの側面は、中等学校時代に経験する欠席や有期退学（停学）の回数が多いことである。表 17 は、CIN と CLA は平均して他の児童の 4 倍から 13 倍の退学を経験していることを示している。CLA-ST は、CIN や CLA-LT よりもはるかに多くの退学を経験しており、この事実は、おそらくケアがもたらす潜在的な恩恵に関係していると思われる。欠席率も高かったが、特筆すべき例外は CLA-LT の承認された欠席であり、それは実際、自治体のサポートを受けていない子どもたちよりも少なかった。

表 17：社会的養護児童とその他の児童の平均的な欠席\*と退学

	承認された欠席 (半日)の合計	無断欠席(半日) の合計	有期退学の回数 の合計	除外されたセッション (有期)の合計	永続的に退学 となった生徒 の割合
2013年3月31日時点で要支援でなく養護もされていない	73.8	17.1	0.4	1.8	0.6%
2013年3月31日時点で要支援	117.2	70.9	1.7	8.7	3.9%
2013年3月31日時点で1年間未満の養護	114.6	88.6	3.2	17.0	8.0%
2013年3月31日時点で1年間以上の養護	69.1	35.6	2.3	11.8	3.3%

\*PRU と AP の欠席データはこれらのデータにはないが、欠席の過少申告はかなり少ない。

永続的な退学の割合は、KS4 における転校の割合の差のかなりの部分を占めていると思われるが、退学と転校の間には関連性がある。

夏休み期間中の転校を除くと、転校によって GCSE が 60 ポイント低下した。欠席と退学をモデルに加えると、学期中の転校の正味の影響は低下した（テクニカルレポート 1）。永続的な退学と転校の関連が、この減少の一部を説明しているに違いない。

退学に関する条件を揃えていない場合、転校が退学の代理指標となる。Weinberg, Oshiro, and Shea (2014) は、ケアを受けている若者の転校回数と退学の間に関連があることを指摘している。CIN と CLA-ST のスコアに対しては、転校よりも欠席と退学の影響が大きく、主に無断欠席で説明されている。しかし、面接から得られたエビデンスによると、これらの知見には重大な例外があることがわかった。進度の高いカテゴリーと低いカテゴリーを合わせた 26 人の若者たちのほとんどは、学校に定期的に通っていた（もちろん、面接を拒否した者は出席率が低かったという可能性もあるが）。無断欠席は必ずしも達成度の低さとは関連していなかった。

*A が 7 つ、B が 3 つ、C が 1 つくらいだったかな…。彼女（母親）は私を学校に行かせてくれなかった  
ので、私はずっと家にいたようなものでした。7 年生の間は、学校に行った思い出がほとんどありませ  
んが、8 年生の 10 月にケアに預けられ、9 月から 8 年生になっても中等学校には行きませんでした。  
(YP9)*

若者の個人的な特性および KS2 の結果と幼少期の環境を揃えた後でも、転校や委託の変更、ならびに無断欠席や退学などは、すべて GCSE スコアが低くなることを予測した。しかし、不安定性を計算に入れると、ケア期間と GCSE のスコアにはもはや関連性がなくなった。

### リサーチクエスチョン 3 に関する知見のまとめ

これらの結果は、転校と委託の変更の両方が、社会的養護児童の教育的成果のリスク要因であることを示唆している。さらに、最新の委託の長さも教育的成果と関連している。委託変更によって転校し、その結果、教育上の成果が悪くなることもあるが、この効果の程度は比較的小さい。転校や委託変更の程度が低いほど、成果は良くなる。どちらの種類の変化も困難に直面している若者の目印となるため、主要な関連性が生じているのかもしれない。

### リサーチクエスチョン 4：委託の安定性と高い達成度との間には、どのような要因が寄与しているのか (Conger & Rebeck, 2001) ?

前述のように、リサーチクエスチョン 1-3 では、児童の経験の特定の特徴や側面に焦点を当てた。リサーチクエスチョン 4 では、ケアや学校での不安定性について判明したことと、それに加えてこれまでの分析で確認されたすべての要因を検討した。その結果、4 つのブロックの要因が含まれる CLAD のみのサンプル（テクニカルレポート 2）を用いた回帰モデルが得られた。

第 1 ブロック — 「変えることが難しい」初期の要因（例：個人の特性、初期の家庭環境）

第 2 ブロック — 青年期にケアシステムが影響を与えにくいその他の要因（例：KS2 の結果、ケア期間）

第 3 ブロック — ケアシステムへの反応と見られる要因（例：委託の変更や転校など）

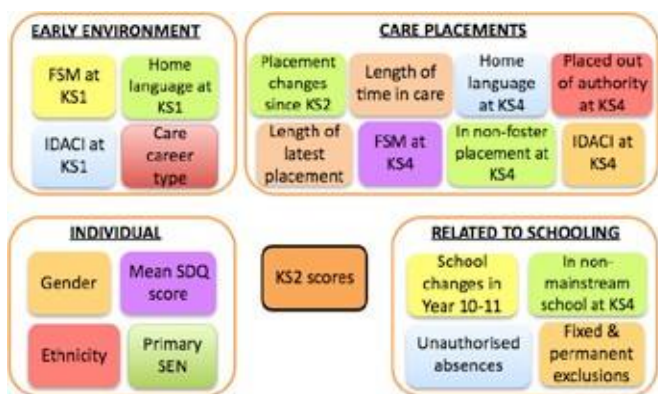
第 4 ブロック — 該当時点での環境に関する要因（例：最新の委託形態と長さ）

結果として得られたモデルを図 1 に図示する。入力された変数と KS4 の結果の有意な予測因子であった変数が示されている（モデルはテクニカルレポート 2 のパート 2 に表形式で示されている）。図 1 を検討するにあたり、それ単独で見た時には GCSE 達成度に関連すると思われた要因が、往々にしてモデル内の他の要因と共起している可能性が高いということに注意することが重要である。結果として、2 つの要因それぞれが成果におけるバリエーションの「特異的な」部分を予測しないというものになりうる。例えば、学校のタイプをモデルに加えることは、永続的な退学を受けたことがあるかどうか、もはや KS4 の結果の有意な予測因子ではないことを意味することがわかった。これは、特定のグループの子どもたちの特徴が重複している可能性があるためだと思われる（例えば、若者が最終的に生徒紹介施設に入るのは、主流校から永続的な退学を受けたことが原因の場合もある）。



図 1 : (a)モデルに入力されたすべての変数と、(b)有意な予測因子のみを示す CLA-LT の KS4 スコアについての最終回帰モデル<sup>31</sup>

KS4 スコアを予測する回帰モデル(R<sup>2</sup> = 0.66)



関連性の大きさ - 標準化ベータ値

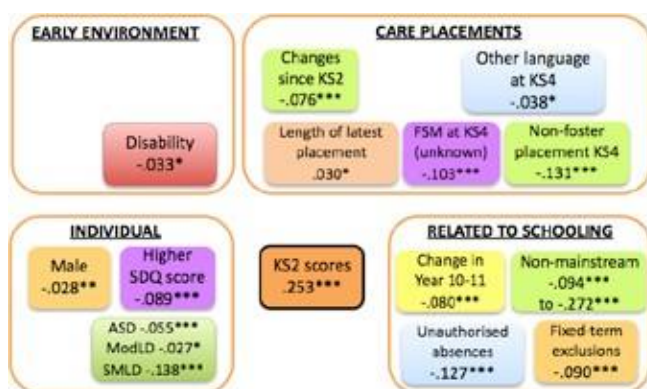


図 1(b)より、他の要因を計算に入れると、KS2 のスコア、非主流校に通っていること、KS4 で里親ケア以外の委託に入っていること、中等学校での無断欠席、重度または重複の知的障害が認められたことが、GCSE での成績低下を最も強く予測する要因であることがわかる。

また、パスモデルを構築して、CLA-LT サンプルにおける社会的養護児童の KS4 成果の予測因子として回帰モデルで特定された変数間の関係を調べ、GCSE 成果との関連性が作用する可能性のある潜在的な経路を検証した。このモデルの予測因子は、若者の KS2 テストの得点、Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の平均得点、および2つの複合指標、すなわち「学校での困難さ」(無断欠席、有期および永続的な退学、KS4 終了時に非主流校に在籍していたことで構成される)、および「ケアでの困難さ」(委託の変更、KS2 終了以降の平均委託期間と居住施設での委託の回数、直近の委託の期間、最終委託が居住施設か他のケアかで構成される)であった。

このモデルでは、KS2 での達成度を揃え、KS4 でケアを受けている若者の達成度は、SDQ スコアの高さに反映される若者の困難さや、学校やケアでの経験における困難さと関連していることが示された。関連はあるものの、学校とケアでの困難さは依然として別々の経験であり、一方が困難であっても他方は困難ではない若者もいる。KS2 および SDQ スコアから KS4 スコアへの直接的な経路のほかに、モデルには有意な間接的経路も含まれていた。KS2 のスコアが高いと学校での困難が少ないことが予測され、ひいては KS4 のスコアが高くなることが予測された。対照的に、SDQ のスコアが高いと学校やケアでの困難さの両方のスコアが高くなり、結果として KS4 のスコアが低くなることが予測された。

ケアでの困難さを経由した経路は、学校での困難さを経由した経路に比べて KS4 の成果との関係が弱くなっているが、それでも結果についての実態のある有意な予測因子となっている。したがって、上記の図 1 (b) の学校教育に関連する要因が、より劣った成果の最も強い予測因子であることに変わりはない。

31 特定の色に意味はない。これはプレゼンテーションの目的のためだけに使用される。

このことは、面接からのエビデンスによっても確認できる。家庭での問題が、学校での怒りや攻撃に波及することはよくあることであった。

*例えば、GCSE の結果には、自分でも驚くほどショックを受けました。試験勉強をしていなかったから。GCSE の頃、家庭生活が原因で学校なんかに行く気がありませんでした。学校でもちょっと攻撃的で衝動的になり、それでクラスの中ではひどい乱暴者で、先生からはどんどん目をつけられるようになり、クラスから引きずり出されたり、後ろに立たせられたりなどして、それが嫌だったんです。何を言ってもわかってもらえなかった。一人にしておいてほしただけなんだと言っても見当もつかなかったようで、彼らは多分、何も知らなかったんだと思います。(YP5)*

特に低進度グループは、授業中にルール違反や規律違反をしたと報告されている。反抗的な態度で教師と衝突したり、目立つために授業を中断させたり、外見について意見の相違があったりした。

#### リサーチクエスチョン 4 に関する知見のまとめ

様々な変数を計算に入れた結果、KS2 での成績を揃えると、CLA-LT の KS4 でのスコア低下の有意な予測因子は以下の通りであることがわかった。

##### 個人の特性<sup>32</sup>

- 男性であること
- 自閉症スペクトラムの SEN と認識されていること
- 中等度の知的障害の SEN と認識されていること
- 重度または重複の知的障害の SEN と認識されていること
- 主に障害が原因でケアを受けたこと
- SDQ の平均スコアが高いこと

##### 不安定性

- KS2 以降、他の児童より多くの委託変更があったこと
- 10 または 11 学年での転校
- 無断欠席が多いこと
- 有期退学（停学）により、他の児童より学校に行けなかった日数が多いこと

##### 該当時点での環境

- 最新の委託に費やした時間が少ないこと
- KS4 の時点で、居住施設またはその他の形態のケアで生活していること（親族ケアや里親ケアとの比較）
- KS4 での FSM ステータスが不明であること
- KS4 で英語以外の言語を家庭内で使用していること
- KS4 で非主流校に通っていたこと（特別支援学校、PRU、代替施設、その他のタイプの学校）

O'Sullivan, Westerman, McNamara, and Mains (2013) が2つの自治体から集めた今回の研究と同様のデータを分析したところ、GCSE スコアが予想よりも低くなる要因として、男性であること、SEN の指定を受けていること、10 または 11 学年で転校したこと、ケア履歴に 10 回以上の委託があること、1 学年に 3 回以上の委託を受けたこと、という 5 つの重要な要因が特定された。今回の研究で得られた知見と強い相乗効果がある。

パスモデルによると、SDQ スコア（「難しい児童」の指標とされることがある）と KS4 スコアの関係は直接的な関係として機能するだけでなく、その関係は学校やケアでの困難さの指標によっても部分的に媒介されることも示された。このことから、「難しい」若者の教育的達成度の改善において重要な検討事項は、彼ら自身の行動上の困難さへの取り組みだけでなく、教育・ケアシステムがそれらの困難に対処する方法、例えば、懲戒処分、退学、委託の持続性などの取り組みもあることが示唆される。面接から得られたエビデンスから、若者の立ち直りを援助するには学校で経験した対応の重要性が確認された。

32 NPD のみの分析では、これらの結果は異なっている。例えば、FSM は GCSE スコアの有意な予測因子である（テクニカルレポート 1 表 22 参照）。

### リサーチクエスチョン 5：里親の向上心などの特徴は、教育的成果にどのような影響を与えるのか (Flynn et al., 2013) ?

里親の特徴を考察する前に、長期的に安定した委託を確立した場合でも、ケアを受けている児童に実親家族が継続的な影響を与えることを認識することが肝要である。面接から得られたエビデンスによると、実親家族の肯定的な面と否定的な面の両方が若者の教育的進歩に影響を与える。両親やその他の実親家族は、他の困難があったにもかかわらず、幼い頃から自分たちの子どもの教育を支援し、彼らの成功を願っていたケースもあった。ある若い女性が説明してくれた。

*私の母がいつも私に学校でうまくやってほしいと願っていたのは、彼女が学校でうまくやれなかったからだと思います。母たちの若い頃は学校に居る必要がなかったので、彼女はいつも私に「学校に行き続けなさい、何かをしなさい、人生で何かを成しなさい」と言っていた。自分はそうしなかったので、いつも「本当に後悔している」と言っていました。(YP8)*

いつも頑張っていると言われる若い女性には、尊敬する大学生のお姉さんがいた (SW4)。また、別の面接対象者は、彼の人生や達成に関心を持つ実母と定期的かつ良い形での交流をしていた (YP7)。

しかし、成績の低い者でも高い者でも同様に実親家族への懸念が生活や教育に影響を与え続けていた。ほとんどの人が、母親を中心とした実親と面会や電話・メール、Facebook などで交流し続けている。子どもたちは、一緒に暮らさなくなったからといって家族の一員でなくなるわけではなく、離別の原因となった問題は何らかの形で継続していた。実親は頼りにならなかつたり一貫性がなかつたりすることが多く、若者が親に対して責任を感じるようになってしまっている。実親との交流は若者たちにとって重要であることが多いが、彼らは自分たちの教育や幸福への影響を認めていた。

*英語の GCSE 試験の前夜、彼女から電話がかかってきて、自殺を知らせるボイスメールが入っていたことを覚えています。集中力を奪われたので、彼女と連絡を取るのをやめました... 2 階に行って英語の復習をしたり、作文を書いたりすることもできませんでした。なぜなら、彼女が何をしているのかが気になって仕方がなかったからです... (YP1)*

英国では、里親に関する全国的なデータは収集されていない。しかし今回の面接では、ケアを受けている児童の教育において里親がどのような役割を果たしているか、有益な洞察を得ることができた。McDermid, Holmes, Kirton, and Signoretta (2012) は、成人の全国集団と比較して、学歴がない里親の割合がやや高く、GCSE を取得している人が多いものの学位レベルの教育を受けている人は全国の集団よりも少ないと指摘している。彼らは、「里親の教育的達成度が提供されるケアの質に与える影響を調査した研究はない」(p. 18) と指摘している。今回面接したサンプル (18 人) では、半数が正規の資格を持っていないと答えている。学校卒業後に教育を受け続けた人の多くは高進度グループの若者をケアしていたが、必ずしもそうとは限らなかった。実際、我々の定性的エビデンスでは、重要なことは里親の学歴自体よりも里親が提供する教育的な励ましやサポートであることが示唆された。

既存の調査によると、親族里親は概して高い学歴を有していない。Nandy and Selwyn (2013, p. 1657) の報告によると、「... 親族ケアを受けている児童の 44% が祖父母と暮らしており、祖父母は高齢で健康状態が悪く、学歴や専門的な資格をほとんど持っていない人が多かった。」この調査では、彼らの資格の有無にかかわらず、若者、教師、ソーシャルワーカーは、ほとんどの委託が教育的に支えになっていると感じていた。

そうですね、日々の様子を聞いてくれたり、宿題を手伝ってくれたり、宿題の印刷や調べ物など、彼らができることを考えてくれたりしていたので、よかったです。(YP1)

個人教育計画 (PEP) 会議や両親の夕べに養育者が出席するのは当たり前のことであった。2 人の若者 (低進度グループ) は、養育者が出席できないように両親に夕べの詳細を隠していた (「彼らには両親の夕べに行くのはやめて欲しかった... 幼い頃、幼児学校で両親の夕べがあったのですが、私の両親の夕べの思い出はいつも悪いものだったので、実際には怖かったです。家に帰るとすぐに殴られたものでした」[YP18])。

ある若者は、自治体の社会的養護児童の中でトップクラスの成績を収めていたが、祖父母と一緒に暮らしていた。

彼女はケアを受けていましたが、家族... 親戚とともに育ってきました。彼らは彼女に対してとても支援をしてくれて、信頼できる存在でした。彼女にとって心強い基盤となっていたのは明らかでした。実際、彼女のケアをしていた祖父母に不幸があったときも、彼女の叔母は彼女を引っ越しさせるのではなく、家族の家に移ってきたほどです。(SW10)

寛容で簡単にはあきらめない養育者は、受容されているという感覚を示していると受け止められていた。当然のことながら、親族里親にはこのような傾向が強いとコメントされている。「... 彼らは、あなたは悪いことをした、と言うだけです。でも明らかに、私のおばあちゃん、私はここで多くのことをしてきたので、私はずっと前にここを去るべきだったかもしれません。」(YP25)

若者たちはたいがい、住んでいる場所で自分が必要とされていない場合、それを感じ取っていた。

... 私の最後の養育者について言えば、私は食べ物や住まい、暖かさなどのサポートを受けていました。そういったものは受けていましたが、愛や気遣い、つまり思いやりは受けていませんでした。まるで、淡々と委託を受けているような感じがして... (YP9)

そして対照的に

私は自分の子供のように扱われた。家族の一員になり、そうなるとう優秀な人材が生まれやすくなります。  
(YP7)

一般的に里親は、若者が自宅で勉強するのに適した場所を提供し、コンピュータ、本、学習ガイドを利用できるようにしていた。面接から得られたエビデンスによると、里親の向上心や期待が高い場合、ケアされている若者は里親が彼らの教育的進歩に貢献していると感じているが、今回のサンプルでは全体的に個々の教師の影響の方が大きいことがわかった。

**リサーチクエスチョン 6：KS4 での達成度の低さや KS2 終了時から KS4 終了時までの進歩は、小学校から中等学校への移行とどの程度関連しているのか、あるいは達成度の格差の拡大は時間の経過とともに徐々に起こるのか？**

表 18 によると、要支援児童や社会的養護児童は、要支援でなく養護もされていない児童と比べて、キーステージ 1 から 4 までの平均的な達成度のスコアが劣っていた。この表では、CIN と CLA の成績の低さが最も目立った特徴であるが、サブグループ間にも大きな差がある。特に 2013 年 3 月 31 日までの 12 か月間にケアを受けていた児童は、KS1 での達成度が最も低かったものの、CIN や最終学年でケアを受け始めた児童に着実に追いついていき、GCSE までに両者を追い抜いた。養護されていたが 12 ヶ月間継続していなかった児童（つまり中等教育の最後の年に、必ずしも初回ではないが、ケアを受け始めた児童）は、KS3 と KS4 の間で CIN に追い抜かれた。

表 18：キーステージでの達成度別にみた養護の状況<sup>33</sup>

	KS1 ポイント、4 テスト平均	KS2 ポイント、3 テスト平均	KS3 ポイント、3 テスト平均	KS4 ポイント、ベスト 8 + 同等のテスト
2013 年 3 月 31 日時点で要支援でなく養護もされていない	15.7	4.65	5.56	341
2013 年 3 月 31 日時点で要支援	11.5	3.84	3.90	185
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間未満の養護	12.4	4.01	4.29	150
2013 年 3 月 31 日時点で 1 年間以上の養護	11.2	3.88	4.21	202

CLA-LT は、教育のほとんどの段階で CIN や他の CLA よりも優れた進歩を遂げていた。しかし、短期的あるいは長期的な養護が教育に与える影響についての判断は、達成度に関係する多くの変数を同時に計算に入れることによって決定される。この問題は、リサーチクエスチョン 4 の回帰モデルの使用によって、ある程度は達成された。また我々のマルチレベルモデリングでは、(KS2 での) 事前の達成度を計算に入れて、生徒が学校に入れ子になっており、さらにその学校が自治体に入れ子になっているという環境価値付加モデルを作成した<sup>34</sup>。

図 2：ニーズグループ別の標準化されたテストスコアの変化<sup>37</sup>

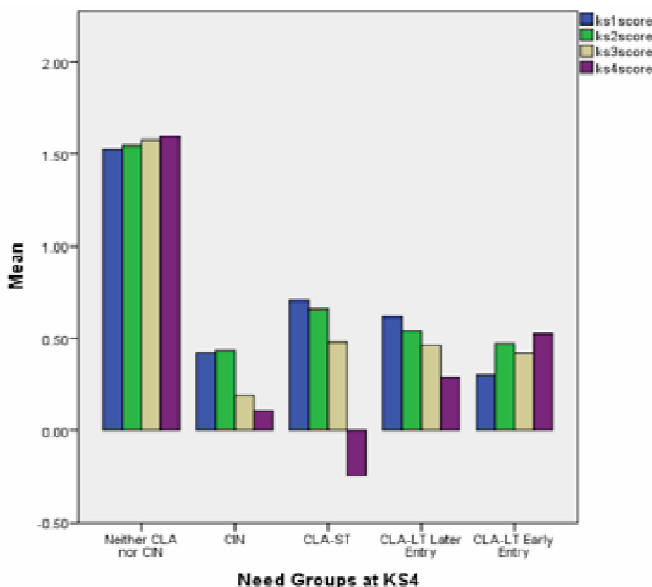
本研究では、中等教育段階での進歩を最も重視しているため、それまでの達成度は、11歳で受けた KS2 の 3 つのテストのスコアを用いて測定した。KS2 の達成度は、GCSE 成果の強力な予測因子である。GCSE で CIN と CLA の成績が劣っていることの一部は、KS2 での達成度の低さで説明される。最大限の結論として言えることは、GCSE の前年にケア開始した児童の成績が劣っていたことは、彼らのケア開始を取り巻く環境が教育に対して有害な影響を及ぼしたということと一致しており、また、12 ヶ月間以上養護された児童の成績が (CIN より) 良いことは、より安定したケアが保護効果を有するということと一致しているということである。生徒の特性 (例えば、以前の達成度や背景など) と学校の影響を計算に入れると、要支援でなく養護もされていない児童と比べた CLA-LT の進歩は小さく、GCSE において全体で 3 等級強 (19.4 ポイント、テクニカルレポート 1 表 19 参照) 劣っていた。これらのグループを区別することで、これらの問題を切り離すことができる<sup>35</sup>。

図 2 は、KS4 の時点でケアも支援も必要としていなかった児童、要支援児童、CLA- ST (CLA KS4 時点で 12 か月間でない) の 4 つのキーステージにおける相対的な達成度を示しており、CLA-LT のカテゴリーを、後期エントリー (KS2 時点で 12 か月間ではない CLA) と早期エントリー (KS2 時点で 12 か月間の CLA) に分けている。このグラフでは標準化されたスコア<sup>36</sup> を使用することで、異なるステージでの生徒の相対的なポジションを比較しやすくしている。棒グラフの高さは、4 つの時点でのグループの相対的なポジションを示しており、グループ内での高さの増加は、他のグループと比較して時間の経過とともに向上していることを示し (つまり「ギャップの縮小」)、一方で高さの減少は、他のグループと比較して時間の経過とともに低下していることを示している。グラフからわかるように、要支援ではない児童と、KS2 でケアを受けていた CLA-LT の 2 つのグループが、他のグループに比べて向上している。他の 3 つのグループはいずれも相対的に減少している。

33 CIN と社会的養護児童が、KS3 でごくわずかしかな進歩していないように見えるかも知れない。テストの点数/アセスメントをさらに調べてみたところ、KS3 で最も成績が悪かった児童には 0 点がつけられていた一方、KS2 でのテストのレベルを下回った児童には 2.5 点がつけられていたことが判明した。

34 方法論的プロセスの詳細については、テクニカルレポート 1 および 2 (<http://reescentre.education.ox.ac.uk/>) に記載されている。

35 KS2 以降にシステムを離れる若者がいることによる変化は、グループを特定できないため、これらのデータでは評価できない。



36 各スコアの総平均値は 0、標準偏差は 1 であるが、比較しやすいように 1.5 を加えている。この追加はトレンドには影響することなく、X 軸の上と下の両方を調べる必要性を無くす。

37 KS2 のスコアリングシステムの異常の詳細についてはリサーチクエスチョン 7 を参照のこと。これはこの段階でのグループ間の差が過小評価されている可能性があることを意味する。

最も劇的に減少したのは、CLA-ST の児童であった。彼らの KS1 での最初のスコアは、要支援でなく全くケアも受けていない児童以外のすべてのグループの中で最も高いものであった。KS4 までに、彼らのスコアは最悪となった。そこまで劇的ではないが似たようなパターンは、2013 年 3 月までにケアを受けていた期間が 12 ヶ月間以上で、しかし KS2 以降に初めてケア開始した児童（後期エントリー CLA-LT グループ）にも見られた。最初のスコアは比較的高かったが、時間の経過とともに順位は着実に下がっていった。おそらく、どちらのグループも家庭での状況が悪化し、最終的にケアシステムに入った児童がいたのではないかと考えられる。このような児童の中には、ケアを開始した後により大きな進歩を遂げる者もいると思われる。しかし多くの場合、教育のための時間の大部分が失われ、その遅れを取り戻すには時間が足らなかった。

面接から得られたエビデンスは、これらの知見および示唆されたあり得る説明と一致していた。意外かもしれないが、どちらのグループでも初等教育よりも中等教育の方が成績が良かったという意見が圧倒的に多かったのである。様々な要素を考慮する必要がある。最も重要なことは、初等教育の段階では若者はまだ実親家族と一緒に暮らしていることが多く、初等教育が往々にして不幸な経験であったということである。ある若者は、7-8 ヶ所の小学校に通っていたと言っていた (YP24)。また、小学校を退学になり 1 年半も学校に通えなかった者もいる (YP16)。一人の若い女性が自身の攻撃性について話したが、それは生活が落ち着いてくると静まってきた。

というのも、小学校の時に差別的な扱いを受けていた時はよく喧嘩をしていたのですが、歳を取って高校生になると、だいぶ落ち着いてきて、人と喧嘩をするよりも学業に専念するようになりました。  
(YP12)

中等教育段階での教育経験の向上につながる要因として最も多く挙げられたのは、それまでに、あるいはその頃に、家を出てケアを受け始めていたことだった。自宅での生活を続けた CIN の相対的な教育成績は、時間の経過とともに着実に低下していった。KS1 では、彼らは早期エントリーの CLA-LT グループよりもわずかに良い位置にいたが、KS2 では早期エントリーの CLA-LT グループよりも成績が悪く、KS3 から 4 にかけて相対的なポジションがさらに悪化した。KS3 では<sup>38</sup>、KS2 の時点ですでにケアを受けていた児童は着実に改善していた。

### リサーチクエスチョン 6 に関する知見のまとめ

ケアを受けている児童と、ケアを受けておらず要支援でもない児童の間の達成度のギャップは、小学校から中学校への移行に応じて突然拡大するのではなく、時間とともに徐々に拡大するようである。これにはいくつかの理由が考えられるが、その中には年長の児童がケアを開始したこと、ケアが短期間の場合その恩恵が限られること、およびケアシステムを去った児童はより良い成績を残しているようであるという事実が含まれる。

38 KS2 と 3 の比較の難しさの説明は、テクニカルレポート 1 を参照のこと。

リサーチクエスト 7: 自治体、学校、バーチャルスクール、ソーシャルワーカー、里親は、ケアを受けている中等学校の生徒の達成度や進歩を向上させるために何ができるのか、また、これらのサービス間の関係が成果にどのような違いをもたらすのか (Pecora, 2012) ?

この分析では、ケアを受けている中等学校の生徒の達成度と進歩に対して、自治体と学校が成果に与える相対的な貢献度を調べた。そして定性的データをもとに、進歩を促す主要因と進歩に対する障壁を特定する。

### 自治体レベルの影響

この研究の重要な目的は、学校や自治体と、養護された児童の教育的進歩および成果との関連性を解明することであった。マルチレベルモデルは、コホート全体 (テクニカルレポート 1) と CLA-LT グループ (テクニカルレポート 2) の両方について別々に実行された。自治体レベルの残差分散はすべてのモデルで非常に小さく (統計的有意性の点でも一貫していない)、学校レベルのものよりも一桁、生徒レベルのものよりも数倍低いことから、自治体は GCSE の成果全体に対して、学校や個々の生徒の影響を超えるような付加的な影響をほとんど与えていないことが示唆された。しかし、この統計的な知見は自治体の役割を否定するものではない。自治体は、ケア委託および学校の委託の両方に関する重要な決定において役割を果たすことで、学校や個人のレベルでケアを受けている児童の成果に影響を与える。このような決定は非常に重要である。なぜなら、それぞれの委託が提供するものはケアを受けている児童の教育的成果に大きく貢献するからである。

### 学校レベルの影響

表 19 に示すように、CIN と CLA は高い割合で、特別支援学校、生徒紹介施設 (PRU)、代替施設 (AP) で中等教育を修了している。PRU と AP にいる CLA の数が比較的多いのは、このグループで特定される行動上のニーズの発生率が高いことと一致し、かなりの数のニーズが深刻であることを示唆している。

表 19 : GCSE 時に通学していた中等学校の種類別に見た養護状況

	特別支援学校*		生徒紹介施設/代替施設		独立	
	カウント	%	カウント	%	カウント	%
2013年3月31日時点で要支援でなく、養護もされていない	8,010	1.3	8,012	1.3	47,061	7.6
2013年3月31日時点で要支援	3,204	23.6	1,162	8.5	86	0.6
2013年3月31日に1年間未満の養護	190	13.7	319	23.0	11	0.8
2013年3月31日に1年間以上の養護	1,061	21.9	595	12.3	42	0.9

\* 独立した特別支援学校を含む。完全なクロス集計はテクニカルレポート 1 に記載されている。

要支援児童や社会的養護児童の達成度における明確な不利益のかなりの部分は、彼らが通っていた学校と関連していた。学校間のばらつきを斟酌すると、それが CIN や CLA の児童とその他の児童との成果の違いの半分以上の原因となっていた。



BESD(行動上・情緒的・社会的困難を抱えた)の生徒は、SENを持たない生徒に比べてGCSEでの達成度が45点低い、すべての生徒が特別な教育的ニーズを持つ学校にいた場合には、さらに126.7点低くなる(ただし、FSMの影響により一部相殺されているため、これら2つの背景指標は混同されているものと思われる)。

学校の種類は、おそらくコホート全体におけるGCSEの成績の最も強力な予測因子である。学校の種類の違いは、SENの構成に関連したGCSE成果のほぼすべての差を説明しているようである。また、学校の平均値、KS2の事前達成度、FSMの受給資格の割合に関連していると思われる差の大部分も説明しているようである。重要なのは、CINとCLAの生徒が成績の低い種類の学校(特別支援学校、PRU、代替施設、FEカレッジ)に偏っていることで、これはGCSEの達成度と強い関連がある。学校の種類によってGCSE成果に大きな差があるのは、異なる種類の学校への入学者の測定されていない特性を反映していると思われる。つまり英国の中等教育制度では、把握されている学力に関連して学校の種類への強力な選択がかかっており、それは生徒の過去の達成度や特別な教育的ニーズによって適切に説明されていないのである。

CIN、CLA、その他の児童が通う中等学校の入学者の違いは非常に顕著である。表20は、CINとCLAの生徒はKS2の平均点が最大で0.6点低く、FSMを受けられる割合が5-10%高い学校に通っていたことを示している。CLAと要支援でなく養護もされていない児童のKS2平均点の0.5ポイントの差は、ナショナル・カリキュラムでの1年間の学習量に相当する(2013年)。しかし概して、CINとCLAの生徒は同級生が自分よりもFSMの資格を受ける可能性が低く、自分よりもKS2の平均達成度が高い学校に通っていた<sup>39</sup>。さらにCLAのみのサンプルでは、CLA-LTグループの約半数の児童がKS2で評価されたときにケアを受けてはいなかったことがわかっており、この後期エントリーグループの教育的成果は、ケアに入る時期が早ければ早いほど良好であった。これらの若者は、他の児童がKS2で高いレベルを達成していない学校に通うという課題に直面する可能性が高かったと思われる。

39 ピア効果については様々な文献があるが、学力の高い同級生や貧困層の少ない同級生を持つことが有益なのか有害なのか、決定的なエビデンスはない。付加価値モデルに文脈的集計値を含めることで、方向性に拘わらず、そのような影響を計算に入れることができる。TIMMERMANS & THOMAS (2014)を参照のこと。

表20：養護状況および学校の集計値

	学校平均 KS2 ポイント	FSMの資格を有する生徒の割合
2013年3月31日時点で要支援でなく養護もされていない	4.7	24%
2013年3月31日時点で要支援	4.4	31%
2013年3月31日時点で1年間未満の養護	4.1	35%
2013年3月31日時点で1年間以上の養護	4.2	29%

生徒の特性、学校の状況やタイプを計算に入れた環境価値付加指標を使用することで、学校と生徒のプロファイルを考慮して、特定の学校が予想よりも良い結果を出しているのか悪い結果を出しているのかを示すことができる。

学校の見かけ上の影響力のばらつき（つまり、CIN と CLA の生徒が「良い」学校よりも「悪い」学校に通っていること）は統計的に有意であったが、それでも CIN と CLA の成果の低下にはあまり寄与していない（テクニカルレポート 1、表 23、図 1 と 2 参照）。実際、CLA 以外の生徒について良い結果を出している学校は、CLA の生徒についても良い結果を出す傾向がある。CLA の生徒および CLA 以外の生徒についての学校の環境価値付加（CVA）の相関は 0.82 である。さらに、ここで報告された相関関係は比較対象となった 5,600 校の「学校」が、特別支援学校、代替施設、PRU、FE カレッジ、セキュア・ユニットなど、非常に多様な性質を持っていることから、関係の真の強さを過小評価している可能性がある。これを適正だと判断するためには、ここでいう学校の影響とは、学校の背景や種類、生徒の受け入れを考慮した上でのものであると認識することが必要である。（学校のコントロール外と考えられる）他のすべての測定変数を揃えた後の分析では、CLA の GCSE における 8 つの得意科目の成績は、他の児童よりも約 3 等級低かった（テクニカルレポート 1、付録 D）。

SEN を有する CIN と CLA の生徒は、同じ SEN 分類を持つ非 CIN および CLA の生徒よりも GCSE スコアが低い傾向にある。この結果は、CIN と CLA は適切な教育を受ける可能性が低いということでもあるが、CIN と CLA の識別プロセスが、より深刻な教育的ニーズを持つ子どもたちを選択していることに起因しているのかもしれない。重要なのは、養護を受けている BESD の生徒は、養護を受けてなく要支援でもない BESD の生徒に比べて、比較的良い成績を収めていることである（12.9 ポイント、GCSE の 2 等級分に相当）。BESD は圧倒的に大きなグループで、SEN と特定された CLA-LT の生徒の 50% を占めている。この知見は、自治体のケアがこのような児童に対する保護的効果を持っていることと一致している。

## 委託の種類

CLA のみのサンプル（テクニカルレポート 2）の分析は、最終的な委託の 60% が里親ケアで、さらに 8% が親族ケアであったことを示している。4 人に 1 人強（26%）が居住施設でのケアを受けており、18% が児童養護施設、残りが寄宿舎学校やその他の施設に入っていた。最後に、小さな「その他」のカテゴリー（6%）があり、これには親との委託や多様で雑多な委託が含まれている。平均的な委託期間は委託によって大きく異なる。親族ケアの平均期間は 5 年、里親ケアの平均期間は 3.5 年強であった。その他のカテゴリーでは、平均 1.5 年から 2 年であった。

表 21 に示すように、最終的な委託形態<sup>40</sup>によって、KS4 の平均スコアに有意な差があった。最も良かったのは、親族ケアおよび親族以外による里親ケアであった。児童養護施設やその他の居住施設でのケアは著しく低い結果となった。また、その他の委託も低いスコアとなった。

表 21：最終委託形態別の CLA の KS4 ポイント

KS4 での委託形態	<i>N</i>	平均	<i>SD</i>
親族ケア	395	259.22	117.62
里親ケア	2886	246.94	118.52
居住型児童養護施設	901	106.31	107.59
その他の居住施設でのケア	267	146.56	127.94
その他	398	78.33	89.66

また、児童を最も長く預かっていた委託のカテゴリーは、児童との相性も良かったようである。しかし、これだけでは表 22 の知見を完全には説明できないようである。

表 22：最終委託形態と委託期間別の CLA の KS4 ポイント

	1 年未満	1-2 年	2-3 年	3 年以上
里親ケアまたは親族ケア	210.95 (121.67) N = 654	247.90 (115.40) N = 716	262.45 (108.91) N = 384	261.18 (117.47) N = 1527
児童養護施設またはその他の居住施設	100.29 (99.48) N = 751	114.56 (114.02) N = 406	113.87 (114.16) N = 188	103.43 (126.43) N = 221

実際に、最終的な委託期間の有意な影響と同様に<sup>41</sup>、この変数と最終委託形態（里親・親族ケア vs 居住施設・その他ケア）との間には、相互作用があった<sup>42</sup>。里親・親族ケアグループでは、最終的な滞在期間が 3 年まで延長されるとより良い成果が得られたのに対し、居住施設グループでは、滞在期間が 3 年以内ではスコアが上昇したものの、その後、最終的な委託である居住施設の滞在期間が 1 年未満の場合と同じようなスコアに戻った。テクニカルレポート 2 によると、最終的な委託が非常に短い（1 年未満）、または長い（3 年以上）若者は、里親委託よりも親族ケアの委託を受けた方が良い結果が得られたが、最終的な委託期間が 1-2 年の場合は逆の結果となった。最終委託が 2-3 年のグループではほとんど差がなかった。

成果という点では、KS4 での委託間の違いは明らかである。里親と親族ケアの委託は、他のタイプの最終的な委託よりも 150 ポイントほど高い平均成果となっている。このことはケアを受けている集団の多様性を想起させる。しかし学校の場合と同様に、この差を異なる種類の委託間での影響の差だけによるものとするのは軽率であろう。この違いの一部は、委託を受けた児童間に存在する具体的な違いを反映していると考えられる。

### 自治体や学校が採用する戦略

面接の中では、若者が経験した様々な形の追加教育支援についても言及がなされた。リソースの制約がこれらの社会的養護児童の教育的進歩を妨げているかどうかについては様々な意見があったが、特にバーチャルスクールの校長たちは、最近になって CLA のための強化された Pupil Premium（生徒保険料）の配分の管理責任を負うようになっているが、現在、リソースは比較的充実しているとコメントしている。その他のサポートとしては、ティーチング・アシスタント、ラーニング・メンター、小グループ、特別な教育的ニーズを持つ生徒などのための学生サポート・センター、追加の復習クラスなどが報告されている。自治体は様々な形態の「Looked After Children Education Teams（社会的養護児童教育チーム）」を運営し、バーチャルスクールは特定の教育イベントを開催し、自治体は民間の教育会社と契約して社会的養護児童をサポートしていた。これらは、学校で行われることもあれば、別の場所で行われることもあった。

面接から浮かび上がってきた重要なテーマは、サービスの統合に関するものであった。低進度グループではあまり顕著ではなかったが、特に高進度グループでは、学校と委託とソーシャルワーカーとの間に効果的な連携があったと報告されている。ある指定教師は、次のように表現している。

40 F(4, 4842) = 421.77,  $p < 0.001$ ,  $H^2 = 0.258$

41 F(3, 4839) = 17.17,  $p < 0.001$ ,  $H^2 = 0.011$

42 F(3, 4839) = 8.20,  $p < 0.001$ ,  $H^2 = 0.005$

すべての組み合わせは、一般的には、ケアを受けている若者たちによくあることです。教育に重点を置く優れた里親がいて、学校には他のスタッフに情報を伝達したり、トレーニングを提供したりする意識の高い指定教師がいて、学校に「アタッチメント意識」があり、ソーシャルワーカーと良好な連携が取れていて、バーチャルスクールの優れたケースワーカーがいれば、これらすべてをまとめて、その若者は進歩し、何らかの形で成功するでしょう... (DT2)

面接を受けた5人の若者が青少年精神健康サービス (Child and Adolescent Mental Health Services; CAMHS) を利用しており、その効果は非常に肯定的であると報告されている。その内容は、死別のカウンセリング、不安とパニック、怒りのコントロール、抑うつ、窃盗、自制不能、自傷行為、自殺未遂など広範な経験に関係していた。

面接の中で繰り返し出てきたテーマは、ソーシャルワーカーの交代が若者の教育に与える影響であった。ある若者は1年半の間に5人のソーシャルワーカーを経験したが、里親は「これでは彼らは彼女のことを知ることができない」とコメントしている。別の若者は、ソーシャルワーカーは学校のことを一度も聞いてこなかったとコメントし、他の若者もソーシャルワーカーとほとんど会っていないと述べていた。しかし、中には非常に親切で協力的な人もいたと報告されている。

彼らは私を励ましてくれて、私が続けられるようにしてくれた.....彼らは間違いなく、私のためになるようにすべてを捧げてくれた。間違いなく。(YP14)

面接から得られたエビデンスは、ケアを受けている若者に対する学校の対応が、様々な形で彼らのその後の成長に寄与している可能性を示唆していた。面接の中では、以前の家庭生活やケアの安定性が欠けていたことが、彼らの適応能力や学ぶ姿勢に影響を与えているという認識が繰り返されていた。

そう、彼は家庭環境に恵まれませんでした。そのため、学校生活を通じて、自尊心やいじめ、家庭での問題などに悩まされていた。だから、彼の集中力が100%になることはなかった。一時的には改善されていた。しかし、確かに、それは彼にとって物事がどのように機能するかという認識にかなり組み込まれていたと思います。(DT17)

進度の高い生徒と低い生徒の大部分が、通常はPupil Premiumで賄われる「1対1」授業の恩恵を受けていた。個人授業を受けていない数人のうち、2人は申し出を受けたが断っていた。若者やその他の人々からは、1対1の授業が若者の教育的進歩に役立っているという圧倒的な意見があった。

はい、確かに助かりました。ある種のことをより深く理解することができ、それがとても役に立ちました。数学がダメだったらもっと支援してくれると言われましたが、結局合格したので、それ以上は必要ありませんでした。でも、いや、それがすごく役に立ったんですよ、1対1で。(YP1)

これは個別指導に関するこれまでの研究と一致しており、被ケア児童への教育的介入に関する2つのレビュー (Dietrichson, Bøg, Filges & Klint Jørgensen, 2015; Forsman and Vinnerljung, 2012) では、厳格なデザインを用いた評価によって、これまでの教育的介入の中で最も優れた実証的なサポートであると結論づけている。何人かの若者は、「もっと早く授業を受けたかった」と不満を漏らしていた。また学校では、教師が時間外に1対1の授業を行うこともあった。

つまり、もし私が毎日定時に帰宅していたら、[名前]は D も取れなかったでしょう。というのも、彼女は授業中にほとんど何もしなかったし、授業の時間は体系的であるために彼女には良くなかったからです。しかし、放課後にお茶を飲んだりラジオをかけたりすると、彼女はもっとうまくやれるようになりました。もし、私がそのセッションを行っていなかったら、彼女はあのような成績を得られなかったでしょう。(DT18)

面接では、モニタリング、コーディネーション、リソース配分、アカウントビリティ機能など PEP ミーティングについて多くのコメントがあった。3人の若者が、PEP ミーティングに出席するために特別扱いされ、クラスから離れるのが嫌だったと具体的に述べている（他の 1 人は授業を休むのが好きであったが）。ある若い女性は、放課後の時間帯に変更することを希望し、指定教師とソーシャルワーカーも同意した。若者たちは大抵出席していた。ある若い女性は、見事な効率性を持ち自分の学歴を問題視していなかったが、自分には自分の時間を使ってやるべきもっと重要なことがあると考えていた。彼女は出席しなかったが終了後に報告書を求め、気になることや納得できないことがあれば何でもフォローアップした。

学校の対応が重要視されたもう一つの分野は「いじめ」であり、その定義は様々であることが認められている。高進度グループ 14 人のうちの 4 人、低進度グループの半数がいじめを受けたことがあると報告している。指定教師によると、亡命希望者の若者の場合は人種差別的な面で教育に影響があったとのことである。これに対する学校の対応は、学校が知っている範囲では役に立ったようだが、特に低進度グループにおいては、いじめが教育への取り組みや進歩に影響を及ぼした一因であったようだ。

面接に応じてくれた養育者の多くは、自分自身が早期に学校を去った経験があり、学校を楽しめなかったと言っている人もいたことから、学校が養育者に働きかけることは重要だと思われる。特に低進度のグループでは、このようなエビデンスがいつもあるわけではなく、里親は「学校に行ったことがない」「招待されたことがない」と言っていた。

中に入って学校を見てみたかったですね。わかりますか...。彼女はかなり落ち着いているようで、私は動揺させたくなかったから、でも私は、もし学校に通っている子供と一緒に住むことになったら、学校に行って学校の様子を見たり、[名前]に対する心配事を伝えたりすることができたらよかったと思っています。(FC22)

しかし、学校とひとりひとりの教師が、教育的サポートの主な供給源であると若者たちに見なされていることを示すエビデンスがあった。例えば、高進度グループの若い女性が説明してくれた。

一番良かったのは、先生方だったと思います、はい。先生方には、学校の勉強や様々なことでいつもお世話になっていて、私を助けてくれたからです。私は、養育者や他の誰よりも先生方といつも関わっていたいと思っていました。養育者やソーシャルワーカーなども助けてくれましたが、先生方はいつも私のそばにいてくれました、いつも。(YPI)

里親が非常に重要であることは明らかであるが、高進度グループと低進度グループの両方の若者が、自分の教育に最も影響を与えたのは教師や学校のスタッフであると強調している。先行研究 (Weinberg et al., 2014) では、ケアを受けている若者との関係を構築し、教育システムのナビゲートをサポートし、安定した学校での委託の維持を助ける「教育擁護者」の存在が、潜在的に大きな影響力を有しているという強いエビデンスが得られている。

今回の調査で若者が指摘した教師たちが、この役割を果たしていた可能性がある。

## 若者の行為主体性

面接から浮かび上がってきた興味深い発見は、私たちが「エージェンシー（行為主体性）」と名付けたもので、若者自身が自分の教育をどのようにコントロールするかということに関係していた。面接を受けた者たち、特に高進度グループの者たちは、自らの教育に携わることを選択した。彼らは、強い自己主張と粘り強さの例を説明し、里親や専門家に対して、どのようにすれば自分たちをよりよくサポートできるかを直接提言した。

耳を傾けてください、いくらでも。耳を傾けてください、そうしてくれる人が少ないから。つまり、世の中には助けを必要としている多くの子供たちがいて、彼らは怖くて相談できない、あるいは拒否されるのが怖くて相談できないのです。ですから、子どもが助けが必要だと言っていたら、耳を傾ける必要がありますし、子どもが言っていなくても、質問をする必要があります。助けが必要かどうか聞いてみてください。多くの子供たちはそんなことを聞かれることはありません。彼らはただ、「何か手伝うことはないか」と聞かれて、「いや、今はない」と言っていました。それは、決して助けを必要としないということではなく、今は助けを必要としないということなのです。(YP20)

## 結論

本報告書は、ケアを受けている児童の達成度と進歩についての広範な定量的・定性的分析をまとめたものである。これまでに報告されたいくつかの研究も得られた知見によって確認されたが、今回の分析ではこれらをさらに発展させ、社会的養護児童の教育的進歩に関わる要因を理解するために、大規模な統計的関連性と詳細な面接データを組み合わせた。このセクションでは、知見から得られた主な結論を要約する。

### 1. 各グループの教育的成果と進歩

- 1.1 主要な対照群（ケアを受けておらず要支援でもない児童）の成績が最も高く、次に CLA の長期滞在グループ、そして要支援児童が続き、CLA の短期滞在グループの成績は最も低いものとなっている。社会的養護児童の中には、養護されていない同級生と同じような成績を収めている児童もいるというエビデンスがあるが、全体の平均値を下げているのは、非常に低いスコアや全くスコアが出ない児童がかなりの数いるためである。各グループにおける児童の相対的な教育成績は、11 歳から 16 歳まで一定となる傾向がある。しかし、事前の達成度が低いケアを受けている若者が、非常に良好な進歩を遂げていることも多い。これらの知見は、自治体が要支援児童の経験した環境よりも教育に適した環境を提供し得るという説明と一致している。
- 1.2 要支援でなくケアも受けていない児童は、期待される教育成績の長期にわたるベンチマークとなる。これらの児童と比較して、CIN は家庭や近隣の貧困の指標によると貧しく、特別な教育的ニーズを持つ可能性が高く、出席率が低く、退学が多く、学校に通っても相対的な達成度が徐々に低くなっていった。
- 1.3 CLA-LT 早期エントリーグループ（KS2 終了時にすでにケアを受けていた児童）は、時間の経過とともに、他の被ケア児童のグループや要支援の児童のグループよりもより大きな進歩を遂げた。CLA-LT 後期エントリー（KS2 終了後にケア開始した児童）グループの成績は、早期エントリーグループと対照グループのいずれと比較しても低下していたが、CIN ほど低下はしておらず、CLA-ST グループよりはマシであった。
- 1.4 CLA と、ケアを受けておらず要支援でもない児童との間の全体的な達成度のギャップは時間の経過とともに徐々に拡大しており、小学校から中等学校への移行後に特異的なものではなかった。我々の分析によると、この理由の一つは、青年期により困難な問題を抱えてケアに入る者は教育面でうまくいく可能性が低いことに関係していると考えられる。さらに、より若い年齢でケアに入った「成績の良い」児童の一部がシステムを離れた可能性（養子縁組、特別後見人、家族再統合）もある（ただし、確認のためにはさらなる分析が必要である）。

### 2. 個人の特性、教育的成果と進歩

- 2.1 CLA グループでは、他の児童に比べて貧困度の指標（FSM と IDACI）が時間の経過とともに大きく変化しているが、これは生活環境が変化しているためと考えられる。このことは、貧困度の指標が、他の児童の場合よりも CIN と CLA における GCSE 成果の予測因子として弱いことを説明する可能性がある。
- 2.2 特別な教育的ニーズは、養護されている児童の間では非常に一般的なものであり、成果の大きな差違と関連していた。特別な教育的ニーズを考慮すると、要支援児童や被養護児童とそれ以外の児童との間の達成度の差はかなり小さくなる。CLA の劣った成果と最も強く関連する SEN は、SLD/PMLD、ASD、MLD である。さらに、障害を持っていることも劣った成果と関連していた。
- 2.3 CLA の GCSE 成果が劣ることを強力に予測する他の変数（テクニカルレポート 2 より）は、男性であることと、SDQ スコアが高いことである。

### 3. ケア委託、教育の成果と進歩

- 3.1 得られた知見より、里親ケアは概して保護要因をもたらし、早期のケア開始は本研究の他のグループに比べて一貫して良好な成果をもたらすことが示唆された。里親ケアは後期のケア開始の場合にも有益かもしれないが、与えられたダメージを完全に回復させることはできない。面接では、ケアへの参加が教育上有益であるという意見が圧倒的に多かった。
- 3.2 里親ケアや親族ケアに入る時期が早ければ早いほど、彼らの成長はより良いものとなる。ただし、たくさんの短いケア期間の間に実親家族との再統合や、頻繁な委託変更や転校が散らばっているようなケースではないことが条件である。
- 3.3 全体的に見て、10歳以降にケアに入ったほとんどの若者は、ケア期間が長い方が良い結果となった。同じことは、最も若い時期（0-5歳）に初めてケア開始した者が、GCSEの年になってもケアを受けていたり、ケアを再開していたりする場合には当てはまらない。
- 3.4 転校と委託の変更は、どちらも社会的養護児童の教育的成果のリスク要因である。委託の変更によって転校することになり、その結果、教育上の成果が低下する可能性を示すいくつかのエビデンスがあるが、この効果の程度は比較的小さいものである。主要な関連性は、どちらの種類の变化も困難な状況にある児童の目印となるために生じているのかもしれない。
- 3.5 最終委託で里親ケアや親族ケアを受けた児童は居住施設でのケアやその他のタイプの委託を受けた児童よりもGCSEの成績が良かった。これは、ある程度、最終委託の長さを反映している。つまり、委託期間が長ければ長いほど良い成果が得られる。

### 4. 学校教育、教育の成果と進歩

- 4.1 学校の種類は、成果の最も強い予測因子の一つである。社会的養護児童の約40%は、KS4<sup>43</sup>で非主流校（生徒紹介施設や代替施設など）に通学しており、他の要因を揃えると、彼らの教育達成度は主流校に進学した60%の児童と比べてはるかに低いものであった。
- 4.2 欠席、退学、転校は、GCSE成果に大きな差をもたらし、CINとCLAが経験する不利な状況の大部分を説明している。教育の不安定性は、CLA-LTよりも、養護を受けていないCINおよび短期のケアを受けているCLAにおいてGCSE成績との関連性が強い。無断欠席は、スコア低下の主要な予測因子であった。

43 これらの若者の中には、主流校と非主流校の両方に在籍していた者もいるかもしれないが、非主流校に通っていた者の方が多くようである。

- 4.3 付加価値分析（テクニカルレポート1）では、自治体レベルでの効果を示すエビデンスはほとんどなかった。しかし学校や生徒のレベルでは、ケアや学校の委託など自治体の方針と実践を反映した多くの要因がある。
- 4.4 CLA、CIN、その他の児童に対する学校の影響の違いを示すエビデンスは限られており、全体的な学校の傾向は、3つのグループの児童が同じように良くも悪くも見える。これは、CLAの生徒に優先権を与える学校入試の改革を支持するものである。しかし、特にCINの生徒については、環境価値付加の高い成果を上げていると思われる学校が少数ながら存在することがわかった。
- 4.5 若者たちは、教師や学校のスタッフを教育の進歩の主要な決定因子であると見ていた。多くの若者にとって、養育者、教師、学校のパストラルサポートサービスは、日常的に彼らの教育上の進歩や、ある程度の一般的な幸福に重要な役割を果たしているが、彼らの教育にあまり関与していないソーシャルワーカーはそれほどでもない。里親の教育支援は、教育的進歩の主な決定因子ではなかった。



4.6 調査に参加したほとんどの若者は、個人教育計画を通じて推奨され Pupil Premium (現在は Pupil Premium Plus) から資金を得ている 1 対 1 の授業を享受し、その恩恵を受けていた。

#### 5. その他の要因、教育の成果と進歩

- 5.1 成功した児童は、他の家族の問題にもかかわらず、かなり幼い頃から実親家族により教育的サポートを受けていたことが多い。多くの場合、実親家族の問題は 10 代の間もずっと続いて彼らの学習に影響を与えており、ケアを開始してもその問題は解決しなかった。
- 5.2 今回の調査では、自分のことを心から心配してくれる人がいることが、若者にとって非常に重要であった。これは高進度の若者と低進度の若者の両方に見られた。若者たちは、これまで経験してきたように期待を裏切られることはなく、自分の人生には意味があると感じる必要があった。それは、自分にとって意味がある以前に他人にとって意味がある必要があった。高進度グループのほとんどが、感謝の気持ちを持ち、失望させたくないと思っている人との関係性に言及した。
- 5.3 リソース (コンピュータ、ブロードバンド、本など) は、一部の親族里親で重要な例外はあるが、里親委託で養護された生徒の成績低下の重要な問題として現れていない。
- 5.4 若者たちは、最終的には自分の教育の進歩は自分次第だが、大人や専門家はその進歩に影響を与えることができるによく述べていた。この点に関して、我々の得たエビデンスにより、若者は支援に対してオープンである必要があると示唆され、それは「情緒的準備」と呼ばれている。

## 研究の限界

本研究では、先行研究の重要な限界に取り組んだ。ケアと教育のデータをリンクさせることで、我々は中等教育での学習状況をケアの経験と関連付けることができた。定量的・定性的知見の統合により、巨大な行政データベースの統計的な力を、個々の面接の豊かな知見とまとめて一つにした。すべての研究と同じようにいくつかの重要な限界があった。

内容の確認、データの作成、変数の組み合わせと生成、分析の企画にはかなりの時間を要する。行政データベースには大きな強みがあるが、里親や居住施設養育者の情報、学校や委託の慣習や不安定性の詳細など、関連するすべての情報が含まれているわけではない。また、一部の学校や自治体では、最も重要な欠席や退学、ならびに一部の SDQ データなどが欠落していた。Bazalgette、Rahilly、Trevelyan が NSPCC のために行った最近の報告（2015 年）では、英国のケア児童に対する法定要件であるにもかかわらず、SDQ の達成率が 90%以上の自治体は 25%にとどまり、達成率が 30%以下の自治体は 8%（12 地域）で、3つの自治体はまったくデータを返さなかったようである。

定量的分析では、2013年にGCSEの受験資格を有した若者に焦点を当て、2013年3月31日時点でケア開始から12カ月が経過している若者の成果を、同世代の成果と比較した。このデザインでは、早期の短期ケアの効果を調べることはできなかったが、これはGCSE以前のデータが収集されていなかったためであった。さらに、定量的なデータはGCSE成果と欠席や退学を集計してモデル化するように整理された。より複雑な、時間を中心としたデータ構造で、ケアの経験を個々の欠席や退学、あるいは中間到達度と関連付けることができれば、より強力な結果が得られるかもしれない。

データベースで省略されたものについては、定性的面接で対処した。それは、関係する力動ならびに社会的養護を受ける若者と彼らのケアと教育に対して責任を負う人たちの視点と説明に光を当てるものである。6つの自治体にアクセスするには、いくつかの代用法があった。期待していた36人の若者との面接は実現しなかった。何人かは気が変わったり、連絡が取れなかったりした。我々の知見の多くは、より大きな若者のサンプルに面接を行った Darmody, McMahon, Banks and Gilligan (2013) および Mannay, Staples, Hallett, Roberts, Rees, Evans & Andrews (2015) の知見と同様であるが、面接の時期までに、多数の若者がケアを終了または転居もしくはその両方を経験したことから、作業が複雑化し予定よりも小さなサンプルしか得られなかった。しかし、私たちが面接した26人の若者とそれに関わる大人たちのデータには非常に満足しており、それは定量的な資料を補完する豊かな洞察をもたらすものと確信している。エビデンスから明らかのように、訓練を受けた、ケア経験のある面接者の起用は、非常に効果的であった。

## 政策と実践への示唆と提言

知識への意図した貢献だけでなく、私たちの得た知見は、ソーシャルワークと教育における政策と実践においても意義がある。

公式の統計や公的な議論において、要支援児童は、ケアを受けている児童に対する、多くの点でより適切な追加の対照群となる。私たちの研究の重要な意義は、ケアシステムとその成果をめぐる社会的議論の性質に関係している。教育的達成度、特に GCSE やその受験の有無は、このような幅広い議論の代用としてよく使われる (Berridge, 2012)。社会的養護児童の生徒とその同級生の間には大きな達成度のギャップがあるという事実は、児童と家族のためのソーシャルワークサービスを非難するものとしてよく用いられる。我々のエビデンスによると、家庭で生活している要支援児童と比較して、ケアを受けている児童は、問題がより深刻である可能性が高いにもかかわらず、より大きな教育的進歩を遂げている (O'Higgins, Sebba & Luke, 2015 も参照)。

ケアに入るのが遅く、場合によっては特別な教育的ニーズを含む大きな課題を抱えている若者がどのくらいいるかを考慮すると、進歩に焦点を当てることで、ケアシステムの成果をより現実的に描き出すことができる。当然ながら、達成度が重要でないわけではないし、若者たちにとって資格の取得よりも成長を基準にして仕事を確保することは期待できない。また自治体にとって、ケア集団による教育的進歩をどの程度、そしてどの程度の期間で期待することが現実的であるのかを見落としてはならない。

CLA の中には、ケアを受けておらず要支援でもない児童と比べて、教育的な潜在能力を開花させるのに時間がかかる者もいる。また、多くがケアシステムに入るのが遅いことを考えると、より長期的な視点で考えるべきである。多くの社会的養護児童にとって 16 歳での主要な公的試験の受験は早すぎるし、行動支援を受けるために特定のカリキュラムのルートに振り分けられることで機会が制限されることもある。面接に応じた専門家は、低学力の生徒の中には、安定し始め、自信と対人関係のスキルを身につけ、それが後に学習やキャリアの見通しに役立つ者もいるとコメントしている。米国の研究者が実証しているように、個人の達成やケアシステムの貢献に対する良好な評価は、18 歳、21 歳、そしてそれ以降で現れる可能性がある (Hook & Courtney, 2011)。

オフステッド教育・ケア査察の枠組みや、政府が発表する自治体のパフォーマンス比較表は、養護されている生徒の教育的成績には、個々の生徒や学校間の違いによるもの以外には自治体間でほとんど差がないことを考慮に入れる必要がある。そのため査察では、各自治体における社会的養護児童の特徴を十分に計算に入れる必要がある。年齢が高く、困難な状況にある若者にケアを受けさせて法的義務を果たしている自治体は、そうすることでそのケアパフォーマンスデータを危険にさらす可能性がある。進歩と達成度のばらつきのほとんどは、生徒の特徴ならびにケアや学校での経験によって説明された。学校の裁量がより大きなシステムでも、自治体が個々の委託や学校を選択したり、サポートしたりすることで、これらの要因に影響を与えることができるのは明らかである。

自治体は、より高いレベルの学校に生徒を入学させ、(一部はバーチャルスクールを介して) 学校のスタッフが適切なサポートを提供するよう保証し、特に KS4 における委託の変更や転校を少なく抑えるためにサポートされるべきである。

実親は、長年別々に暮らしてきた人も含めて、ケアを受けている若者に大きな影響を与え続ける。これらの GCSE の学生たちは、より自立してケアから離れる時期が近づくにつれ、このようなつながりを開始し助長していたのかもしれない。実親が継続的な問題を抱えている場合、若者の集中力や努力に影響を与える恐れがある。

長期的な里親委託、中でも安定していると思われるケースでは、ソーシャルワーカーにとって優先順位が低くなることもあり、特にリソースが限られている時にそうなりやすい (Schofield & Beek 2009)。しかし面接では、安定した長期の里親委託が成功している場合でも、実親家族に対するソーシャルワークのサポートが若者の教育にとって重要であることが示された。

社会的、情緒的、およびメンタルヘルス上の困難を抱える生徒を支援するための取り組みが、退学（外的にも「内的」にも若者が質の高い教育を受けられない可能性がある）や転校など筆者らが強調した教育問題に対処するため、より広く周知され、研究される必要がある。こうした取り組みには、育成グループ (Cooper & Whitebread, 2007)、「アタッチメントを意識した」学校 (Rose, 2014)、生徒に対する「情緒コーチング」(Rose, McGuire- Snieckus, & Gilberta, 2015) などが含まれる。若者たちは、自分たちの教育的進歩は個々の教師や養育者の特性、スキル、コミットメントによるものだと考えている。面接では、自分が何をしているのかを理解し、粘り強く働きかけ、尊敬を集め、心から気にかけてくれた教師たちの名前が挙がった。生徒たちは、効果的でない人や無神経な人たちに言及した。

里親は、チャレンジングな行動をとる脆弱な若者の世話をするプレッシャーに耐えられるように適切にサポートされるべきであり、そうすることで、委託の安定性が高まり、若者の教育的進歩に役立つはずである。これまでの研究では、個々の里親が委託の安定性と児童の成果に違いをもたらすことがわかっている (Sinclair, Baker, Lee, & Gibbs, 2007)。我々の得たエビデンスから、生徒たちは、安全で安心感があり個人が大切にされていると感じるなど、一定の前提条件が満たされると学習に取り組むことができることが示唆された。多くの場合、委託の中断は転校のリスクと結びついており、生徒たちは、たとえタクシーで長時間異動することになっても元の学校に残りたいと一貫して答えていた。しかしタクシーの手配は、より柔軟に、個々の若者のニーズに対応する必要がある。

生活の中で起こることに、若者たちをより深く関与させよう。生徒たちは生活の中でストレスを何とかしようとはがいていることが多いことを鑑みれば、彼らと一緒に取り組み、意思決定に参加してもらうための真摯な努力をするのは賢明なことである。面接に応じた若者の多くは、PEP やその他のミーティングに出席するために授業から外されたことなど、自分の教育に役立った要因や妨げになった要因について深い洞察を示した。

教育改善のための戦略は、居住施設の従事者全体で取り組む必要がある。今回の結果で意外だったのは、GCSE を受ける被養護者のうち居住施設で暮らす生徒の割合 (18.5%) であった。これは、小規模な居住型児童養護施設よりもはるかに幅広いグループであり、寄宿舎学校やセキュア・ユニットも含まれていた。このような生徒たちは、最も困難な生徒の一群と言えるであろう。英国（およびその他の地域）の居住施設はかなり縮小しているが、より多くの年齢の高い社会的養護青年たちにとっては重要な経験となっている。

特に親族里親は、その多くが影響を受け (Nandy and Selwyn 2013)、学校教育にも悪影響を及ぼす可能性のある経済的プレッシャーに対処するためのサポートが必要である。他の要因を計算に入れれば、親族里親と一緒に暮らしている生徒は、親族以外の委託を受けた生徒と比べて教育的に不利ではないことを確認できたのは興味深いことであった (テクニカルレポート 2)。

## 今後の研究

例えば、ヨーロッパの政策と実践の比較 (Jackson & Cameron, 2012) や、ケアがうまくいって大学に進学するケア卒業者の背景要因 (Jackson & Ajayi, 2007) など、他にも多くの研究が先行していることを認識している。これらの研究も他の研究も、これまでの有用な改革に貢献し、今後の研究に重要な示唆を与えている。今回の調査で浮かび上がった、さらなる研究に値すると思われる具体的な疑問は以下の通りである。

### 理論的な疑問

これまでのところ、我々は得た知見を特定の理論的枠組みの中に位置づけてはおらず、その作業は今後の課題である。学際的な研究チームは、さまざまなアプローチや解釈に適している。例えば、安定したケア委託、若者の問題解決や学校におけるメンタルヘルスの取り組みに関する知見は、アタッチメントの枠組みの中に位置づけることができる (Schofield & Beek, 2009)。若者のコーピングメカニズムや提供されるサービスは、レジリエンスの観点からもアプローチすることができる (Rutter, 2012; Ungar, Ghazinour, & Richter, 2013)。私たちの面接対象者は、彼らが家族の崩壊やストレスにどのように対処しているかについての洞察を与えてくれた。実際、自分の状況を何とかしていく上で若者の「行為主体性」の感覚、および学習のための前提条件を示唆することは、子供時代の社会学の枠組みの中で設定することもできる (Mayall, 2000; Prout & James, 1997)。

### 概念的な疑問

SDQ データの定量的分析は、その既知の限界のため、本研究のデザインでは小さな役割しか与えられなかったが、驚くほど優れた成果の予測因子であった。SDQ データの広範な欠落に対処する戦略 (Bazalgette et al., 2015) により、ケア、行動、学習の経験に関するより強力な知見を得られる分析が可能になるかもしれない。Goodman (2001) は、養育者 (本研究では単一の情報源) に加えて、教師や若者からもデータを得ることの重要性を報告しているが、Bazalgette らは、データの収集方法に広く一貫性がないことを指摘している。SDQ の Prosocial サブスケールは、現在、ルーチン的には報告されていないが、我々の得た知見から、このサブスケールを分析することでケアを受けている児童の教育における行動の役割について、さらに重要な洞察が得られる可能性が示されている。

安定性を概念化する方法に関してさらなる疑問が生じた。O'Higgins ら (2015) のレビューは、研究者は様々な方法で安定性を概念化しているが、共通の定義を確立するためにはさらなる研究が行われるべきであると示している。また、ケアを受けている児童の多くは、いったん家に戻っても再びケアを受けることになり、その経験は教育的成果に大きく関係する。

### ケアを受けている青年の教育に影響を与える要因

青年期の集団にとってよいケアとは何か、これが研究の重要な優先事項として残っている。Luke, Sinclair, Woolgar, and Sebba (2014) は、特定の介入が実施される以前の基本的なケアの質が、ケアを受けている児童のメンタルヘルスに関連する要因であると結論づけている。また、特に複数の職種に焦点を当てて、ケアへの後期参入者のための特別なアプローチを開発し、検証する必要がある (ADCS, 2013)。

## 学校、教師、および/または養育者が採用する特定のアプローチ

少数の学校が CIN の生徒に対してより良い結果を出していると思われる理由を調査する必要がある。また、生徒の成長は教師や養育者のスキルにかかっているため、教育支援を行う際に彼らを巻き込んだ取り組みや評価を行うことが有効であると考えられる (Flynn, Marquis, Paquet, Peeke, & Aubry, 2012; Osborne, Alfano, & Winn, 2010)。また、学校で行われている社会的、情緒的、およびメンタルヘルス上の幅広いサポートとその効果を評価することにも価値があるかもしれない。また、バーチャルスクールの校長からは、Pupil Premium Plus をどのように使えば最も効果的かを調査する必要性が指摘された。

## データセットをつなぐ方法論的作業

この研究は、この分野の複雑な問題を調査するために用いるリンクされたデータセットの可能性の始まりに過ぎない。テクニカルレポート 1 と 2 は、これを行うための方法論的な技術に大きな進歩をもたらしたが、同時に、このプロジェクトの範囲を超えた方法論的な課題も提起している。これらのデータセットの開発者らとさらに話し合い、今後の優先順位を決定する予定である。

この種の研究としては英国で最も包括的な研究を実施する中で、どのようにして学校やサービスへアプローチすれば、社会的養護児童の学校教育と教育的成果に福音をもたらすことができるのか、より多くのことがわかってきた。この情報が有効に活用されることを願っている。

早稲田大学大学院総合研究機構  
社会的養育研究所  
監訳チーム  
担当：半田 聡（千葉メンタルクリニック）  
2023（令和5）年 3 月

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION